★基本CG枚数／11枚
★ページ数／文章形式で全82枚
★プチ日焼けver.も同梱!!
次期キャプテンに課せられる屈辱の儀式。
ロスト・
陸上部編
The Lost Uniform
ユニフォーム
Soar, like a petal.
百梅学園陸上部
白坂 唯

【8月21日(水)】

それが彼女にとって「青天の霹靂」であったことは、容易に想像がつく。

人柄も良く、見た目も華やか、スポーツも万能で、それでいて頭も良い。

才色兼備とは彼女の為に用意された言葉と言っても良い程、人も羨む存在だった。

そう、昨日までは……。

【8月20日(火)】

彼女は陸上部に所属していた。
種目は短距離と走り幅跳びで、常に先輩を脅かす程の記録を出していた。
その力は大きな舞台であればある程発揮され、この日も大会最終日、百梅学園の陸上部として最後まで競技を続けていたのは、彼女一人だけだった。

彼女の名は、白坂唯(しらさか ゆい)。
今時の女子でありながら、しっかりした考えを持った頼れる存在として、周りからの信頼も厚かった。
次期キャプテンは、彼女以外に考えられない。
顧問はもちろん、引退を控えるメンバーにとってもそれは同様だった。
ただ、人間の中で最も醜い習性が、彼女を地獄へと突き落とすこととなる。

同学年からの「嫉妬」だ。

その時は、刻一刻と彼女に迫っていた。

二スト オブ 陸上部編

全ての競技が終わり、唯の最終結果は走り幅跳びで五位入賞。来年度に期待が膨らむ内容だった。

その夜、先輩達の送別会も兼ねた食事会が開催されたのだが、その場も彼女の話題で持ち切りだった。顧問を除いては全員女子だけの世界。時折飛び出す今時女子の恥知らずな言動には顧問もタジタジだったが、このチームの仲の良さが伺えるひとときだった。

唯も話題の中心となりながら、時には別の話題を振ったりと、上手にその場の空気を読みながら食事会の雰囲気を作っていた。

みんな笑顔で、とても良い送別会となった。

その会の締め括りとして、顧問の平田は引退する部員一人ひとりに熱いメッセージを送る。

時折鼻をすする音が聞こえ、感動のシーンもクライマックスを迎えた。

そして最後に、部員全体へ言葉を投げ掛ける。

「今日で引退する者も、明日から主役になる者も、それぞれの思いと思い出は一つだ。しっかりとバトンで受け渡しできているよな？重要なのはバトンを受け取った方。いいな、白坂。そのバトンはお前達の代でしっかりと育てて、また次の代に継承していくんだ。先輩達の思いを無駄にするようなことだけはするなよ、いいな！」

「はいっ！」

唯の返事はその場に響き渡る程の、とても気合の入った理想的な返事だった。

（クスクス…）

その返事とは裏腹な黒い嘲笑がその場の片隅から起こっていることに、唯はまだ気付いていなかった。

そして、彼女の運命は翌日、急激に下降線を辿ることとなる。

【8月21日(水)】

「あれ…？やっぱりないなぁ。ユニフォームなんて失くすわけないのに。」

唯は部室のロッカーの前で怪訝な表情を浮かべていた。昨日、家に帰った後でユニフォームを洗濯に出そうとした時、バッグにユニフォームが入っていないことに気が付いた。
その時も不思議に思ったのだが、もしかしたら部室のロッカーに置き忘れてきたのかもしれない、というよりもむしろそれ以外は考えられないと思い、そこにユニフォームがあることを前提としてロッカーを開けた結果、ユニフォームは見当たらなかった。

「やっぱりバッグに入れたよね。なんとなく覚えあるし。あとで沙耶香達にも聞いてみようかな。」

練習の時にはユニフォームは使わない為、今日の練習に影響が出るわけではなかった。
とりあえず練習用のTシャツとスパッツに着替え、グラウンドに出てウォーミングアップを始めることにした。

Soar,
like a
petal.

朝の天気予報では、今日は猛暑日の予報だった。
まだ午前中ではあるが、気温は既に三十度を超えていた。
ストレッチをしただけでも汗ばみ、既にTシャツやスパッツには汗が滲み始めていた。

Soar,
like a
petal.

「今日もヤバそうだな。水分補給は念入りにしとかないと。」

いつものルーティーンをこなし、走り始めた所で唯はふと思った。

（今日はみんな遅いな…。）

唯はユニフォームが気になっていた為、いつもより早く家を出たのは間違いない。

それにしても、そろそろ誰か一人くらいグラウンドに出てきても良い頃だ。

そんなことを考えているうちに、ジョギングもいつもの周を走り終えていた。

「ハァ…ハァ……みんな遅いな…部室行ってみようかな…ハァ…マジ暑いな今日…ハァ…ッ…」

唯のウォーミングアップは、他の部員に比べても念入りで、時間も長い。
その為、大体ジョギングをしている間にはみんな揃っているのがいつもの流れだった。
陸上は基本的に個人競技の為、それぞれが個人的な練習メニューを組んで行動することが多い。
顧問も比較的放任主義であり、部のことはキャプテンに任せ、練習に顔を出す時もまばらだった。

日本特有の体にまとわり付くようなジメジメとした蒸し暑さに、唯は既にかなりの汗をかいていた。
クールダウンさせるように、ペットボトルの水を少し口に含む。

「ふぅ…よし。ちょっと部室戻ってみよう。」

唯は少なからずの不安を抱えながら、部室へと向かった。

ドアを開けると、沙耶香を中心に数人の部員達が談笑していた。

「なんだ、来てたんだ。もう時間過ぎてるよ？」
しかし、誰も唯の言葉には反応せず、談笑を続けている。
その声に覆い被せるように、大きめの声で唯は言った。
「ねぇ、もう練習始める時間だって！」
すると沙耶香が立ち上がり、唯の目の前まで近付いてきた。
そして鼻先が触れるか触れないかの所まで顔を寄せ、やや下から鋭い眼光を突き付けて言った。
「何なの？もしかしてもうキャプテン気取り？」
「そ、そんなつもりじゃないけど…やらないの？練習。」
「アンタの下で部活する気になんてなれないんだよね、あたし達。」
「な、何よそれ……昨夜の先生の話、忘れたの？」
「だってあれ、アンタに言った内容でしょ？返事したのも唯だけだったじゃん。先生も白坂って名指しで言ってたし。」
周りの部員達も、そうだそうだと言わんばかりに頷いている。

「ちょっと何さっきから屁理屈ばっか言ってるのよ…いきなりどうしちゃったの？」

「いきなり…？バカじゃない？ずっとだよ！」

その言葉をきっかけに、唯の頭の中は混乱し始めた。
昨日まで親友だと思っていた沙耶香をはじめ、他の部員達も自分のことを敵視している。
しかもそれは今に始まったことではなく、目の前の沙耶香は「ずっと」だと言う。

「あのさ、わけわかんないんだけど…今までのことは何だったの？ずっと一緒に練習頑張ってきたじゃん！もうすぐ私達の時代だねって、気合い入れてたじゃん！」

「でも、アンタの下になるとは言ってないよね？」

「私がキャプテンになるのが気に入らないの？だったらキャプテンなんて辞退するし、そもそもまだ選ばれたわけじゃないし。」

「フン、どう考えたってキャプテンはアンタでしょ。辞退？カッコ付けんのもいい加減にしなよ！」

「だったらどうすればいいのよ…」

沙耶香は右の口元をニヤリと吊り上げ、唯に告げた。

「そうねぇ…土下座でもしてもらおっかな。」

「ど、土下座って…本気で言ってるの…？」

「この状況で冗談言ってるように思う？大マジだよ。わかるでしょ？」

「……土下座したら、練習に出てくれるのね？」

「アンタの土下座見てから決める。」

唯はその言葉を信じて、沙耶香の前で跪いた。

Soar,

「ほら、何て言うの？そのくらい自分で考えなよ。」
唯は言葉が出てこなかった。それもそのはず、何を謝れば良いのかも理解できていないのだ。
それでも唯は必死に言葉を絞り出した。
「……ごめんなさい…」
「…は？それだけ？何なのその小学生レベルの土下座は。」
「だって…そんなこと言われても……」
――悪いことは何もしていない。
だが、察しのいい唯は、これ以上は言わない方が身の為だと感じ、口を噤(つぐ)んだ。
「自分で考えなさいよ。どうしてこうなったのか。」
それは物凄く理不尽な要求だった。全く身に覚えのない唯に対し、無理矢理罪の意識をなすり付けようとしているのだ。まるで刑事ドラマによく見る自白を強要するワンシーン、もちろん冤罪だ。
唯は歯を食い縛りながらも、沙耶香の気持ちを必死に探った。沙耶香は何に対して怒っているのか、何が気に入らないのかを……。
「まだキャプテンに選ばれたわけでもないのに…その気になって張り切ってて…嫌な気にさせてごめんなさい……」

ガリ

「……っ！？」

「まあその答えも丸っ切り間違いなわけじゃないけど…わかってないね、唯。」

唯はこれまでの人生の中で、親からも愛され、周りの誰からも好かれ、憧れの存在として特別視されてきた存在。それが今、親友だと思っていた沙耶香の目の前で土下座をし、頭を踏み付けられている。普通の人間でも屈辱的であるのに、唯からしたらこの仕打ちは耐え難い程の屈辱だろう。

一方の沙耶香は、あまり家庭に恵まれていなかった。両親は幼い頃に離婚。父親に引き取られ、母親の愛を知らない。父親は不器用な性格から、人一倍仕事をして養うことで沙耶香に愛を伝えてきたつもりだが、まだ若い沙耶香にはその愛情は伝わっていなかった。「お父さんは自分のことを放ったらかしで仕事ばかりしている」というのは、沙耶香の口癖になっている程だった。

そんな沙耶香の目には、唯の姿があまりにも眩しかったに違いない。

「アンタがキャプテンになることはさ、みんな納得してるよ。誰よりも頑張ってるし、センスもあるし、仕切る力もある。」

「だったらどうしてこんなことするのよ…」

「出来過ぎなんだよね～、何もかも。"天は二物を与えず"なんて言うけどさ、アンタ一人でどんだけ持ってくのよ。」

唯にはどうすることもできない部分を、沙耶香は責め立てる。

「誰からも愛されて、親からも愛されて、見た目もよくて勉強もできて、部活ではキャプテンって…それあたしに対しての当て付け？」

「そ、そんな…」

「別にいいのよ、キャプテンでも。でもさ～、あたし達に言うこと聞いて欲しかったら、まずアンタがあたし達の言うこと聞くべきじゃないの？」

昨日まで親友だと思っていた沙耶香のあまりにもショッキングな言葉が、唯の胸を突き刺した。
涙が自然と頬を伝う。
「わかったよ……沙耶香の気が済むまで何でも言うこと聞く。」
鼻をすすりながら、擦り切れるような声で唯は言った。

「あっはは、だって。とりあえずさ、筋トレから始めよっか～。」

そう言うと、沙耶香は唯の髪の毛を引っ張り強引に立たせる。そして、いつも自主練の時に使っているベンチプレスへ横たわらせた。

「今日からアンタはキャプテンだから～、60キロね。」

「ちょ、ちょっと待ってよ…そんな重さ、持ったことない！」

「何いきなり口答えしてんの？あたしの気が済むまで言うこと聞くんじゃないの？」

そして沙耶香は他の部員達と共にゆっくりバーベルを降ろし、唯の手に握らせた。

Soar,
like a
petal.

「うっ…くぅ……！」
「お～、すごいじゃん、さすがキャプテン。」
「ホントホント、私だったら絶対無理だもん。」
苦しそうな唯を尻目に、他の部員達は涼しげな顔で談笑を始める。
「60って結構重くね？普通の男子くらいの重さあるよ。」
「だよねー、私も無理だわw」
「わ、私だって無理だよ……お願い、もう降ろして…ッ！」
そんな唯の叫びなど、誰も聞く耳を持たなかった。それどころか沙耶香はその会話を聞きながら、唯の頭の上でニヤニヤと不敵な笑みを浮かべている。
「こ～んな所にいい椅子があるじゃ～ん♪疲れてるから座ろっと。」

Soar,
like a
petal.

「よいしょっと♡」
「ん、んんぅうッ！！？ん……んふっ！！」
「ちょっと唯、鼻息くすぐったいってw」
「んっ…んふぅうッ！！」
「あっはは、沙耶香のケツに唯の顔が埋まってるw」
「沙耶香って意外とお尻大っきいからね～。」
沙耶香は唯の口を塞ぐように座っている為、唯はほとんど声が出せない状態になっていた。
なんとか鼻だけで呼吸はできる状態だったが、その鼻には沙耶香の股間が密着していた。
息を吸うには、沙耶香の股間の匂いごと吸い上げなければならなかった。
「ねぇ唯、そんなにあたしのマンコ嗅がないでくれる？」
「んんぅう、んふっ……んんぅ！」
「鼻の穴大きく広げちゃって…可愛いw」
沙耶香は唯の苦しそうに歪む顔を見下ろしながら、悪戯に微笑む。

「うちらも悪戯しちゃおっか？」

「だなw」

そう言って部員達は顔を見合わせると、ガラ空きになった胸や股に手を伸ばす。
唯は沙耶香の太腿によって視界もほとんど遮られ、手もバーベルで塞がっている。
抵抗など、できるはずもなかった。

Soar,
like a
petal.
MIZUNO
asics

「んふぅぅぅぅ！！！」

「きゃあぁ、ちょっと唯、感じちゃうからやめてってば！」

「あっはははははw」

女子達の高笑いが部室内にこだまする。

こんな状況でも、60キロという重さにも関わらず、バーベルを落とさないのはさすがだと思える。

しかし、残念ながら今日のこの場にそれを褒め称えてくれる人間は一人もいなかった。

それどころか、どんどん追い討ちを掛けるような言葉を投げつけるばかりだ。

「もっと股に力入れなよ。努力は女の又に力って書くでしょ？アンタの好きな言葉じゃん、唯。」

「んふぅ、ンッ……んんんぅぅぅぅ！！！」

「ねぇ、白坂キャプテンのココ、なんか湿ってきてるんですけど～w」

「え？嘘でしょ？マジ練習中に何興奮してんのよアンタ。」

沙耶香はそう言って唯の顔からお尻を上げた。

「キャプテンが筋トレしながらマンコ濡らすってどういうこと？」

沙耶香は唯に詰め寄る。

「筋トレって…こんなのただのいじめじゃない。」

「じゃあ何？いじめられて濡らしたってこと？」

「え、ヤバっ、ドMじゃん。」

どんな言い訳を付けようが、スパッツにまで染みを作ってしまった唯には、弁解の余地はなかった。

「最低なマンコだね…床に寝転んで股広げな。マッサージしてあげる。」

「ほらぁ、横になんなよ。沙耶香に言われたらさっさと動くんだよ！」

髪を掴まれ、腕を引っ張られ、唯は強引に床に押し倒された。

Soar,
like a
petal.

「言っとっけど、マッサージだからね。いじめとか訳わかんないこと言わないでね。」

沙耶香は唯の両足首を掴み、電気アンマを仕掛ける。

唯は腕で顔を隠しながら、その刺激に必死に耐えている様子だった。

「何顔隠してんのよ、こっち見なさいよ。どんな顔して感じてるのか見せて？」

「ほら、顔見せるんだよ！」

Soar,
like a
petal.

「あっはは、何泣いてんの？気持ちよくてたまんない？」
「……最低…っ……ずっと親友だと思ってたのに。」
「それはアンタが勝手に思い違いしてただけでしょ？最低とか言われる筋合いないんだけど。」
これは何かの間違いで、まだどこかで沙耶香を信じたいと唯は思っていた。
いや、信じたいというよりかは、現状が信じられないといった気持ちが強いのかもしれない。
心に大きな傷を負いながらも、唯は涙ながらに訴える。
「二人で…この百梅学園陸上部を引っ張っていこうって言ってたのは嘘だったの？」
「嘘ではないけど…アンタがいればあたしはいらないじゃん？」
「そんなことない！私には沙耶香の存在が必要だった。」
「だからそれはアンタの都合でしょ？悪いんだけどさ、あたしを巻き込まないでくれる？アンタにはあたしの気持ちなんてわからないんだから。」
「そ、そんな……。」
「てかさー、なんか足の裏が生温かいんだけど。まさかまた興奮してる？」

Soar,
like a
petal.

「ねぇ、泣きながら友情論とか語ってさ、マンコまで濡らすのやめてくれない？」
「あっはは、マジウケるw」
「うわっ、マジでさっきよりも染みデカくなってんじゃん。」
そんな言葉達が、唯の心をどんどん傷付けていく。
「沙耶香がグイグイ足で押し付けるから染みが広がっただけでしょ…」
「はぁ？人のせいにしないでよ。だいたい何の染みよ？アンタのマン汁でしょ、それ。」
「くっ……」
唯は何も言い返せなかった。どんな理由があれ、沙耶香の言う通り、濡らしたのは自分だ。
女のツボを的確に責められ、追い詰められ、自分でも意図しない所で体が高揚したのは事実だった。
どうして濡れているのかさえ、唯自身もわかっていなかったのだ。

沙耶香は自分のスポーツバッグの中から何かを取り出した。唯のユニフォームだ。

「なんで沙耶香が持ってるのよ…」

「ん？昨日の食事会の時にこっそり抜いておいた。」

「返して。」

「うん、返すよ。だから今、これに着替えて。」

「なんでよ…洗濯だってしてないし。」

「そんなマン汁の染み込んだスパッツ、見たくないんだよ。キモいから早く着替えて。」

それを言われると、唯には返す言葉がなかった。沙耶香からユニフォームを受け取る。

「あぁ、下着とか全部脱いでね。直でブルマ穿いて。」

唯は沙耶香に言われるがまま、Tシャツ、スパッツの順に脱いでいき、少し戸惑いながらも下着を脱ぎ始めた。ユニフォームで体を隠しながら、ショーツを脱いだと同時にレーシングブルマを穿く。その後、片手で胸を隠しながら、器用にトップスに体を潜らせる。

昨日の大会で5位に輝いたアスリートが、そのままの姿を現した。

百梅
白坂

ほどよく筋肉のついた唯の体は、そのユニフォームを際立たせていた。
唯は試合の時、いつも髪を後ろでまとめて縛る。それほど長い髪ではないが、集中力を高める為だろう。
ユニフォームを着ると無意識に体が動くのか、いつものように髪を縛り始めた。

「いいじゃん唯、気合入ってきたね。」

「別にそんなんじゃないし。ってゆーかわざわざユニフォームなんて着て何するのよ。」

「う～ん、キャプテン就任の儀式？だって壮行会とかでもユニフォーム着せられるじゃん。」

「意味わかんないし。」

「そういえば、唯って上体反らしが苦手って言ってたよね。走り幅跳びには上半身の柔らかさが大事だってよく言ってたじゃん。」

「そうだけど…急に何？」

「手伝ってあげるよ。ほら、こっち来て。」

「な、何なのよ…ちょっと、痛いって……沙耶香、なんでいきなり……」

MIZUNO
百梅

「あぐぅうぅぅ！！」
「ホントだ、唯って意外と硬いわ。」
「くっ…沙耶香、やめて……痛いって！」
「何言ってんのよ、協力してやってんのに。もしかして、昨日の5位で満足してるんじゃないよねぇ？」
「協力って…そんな気なんてないくせにっ……あがっ…！」
「あたしのお姉ちゃん幅跳びやってたけど、こんなモンじゃなかったわよ？ほら、もっと反らしな！」
「あぁあぁぁ…ッ……くっ…もう無理だって……これ以上は上がらない……」
すると沙耶香は他の部員達に指示を出す。
「アンタ達も手伝ってあげて。これ以上無理って言うからさ、あれ持ってきて。」
「りょうか～いw」

そう言ってその部員はニヤニヤと頬を緩ませながら、ある物を持ち出してきた。

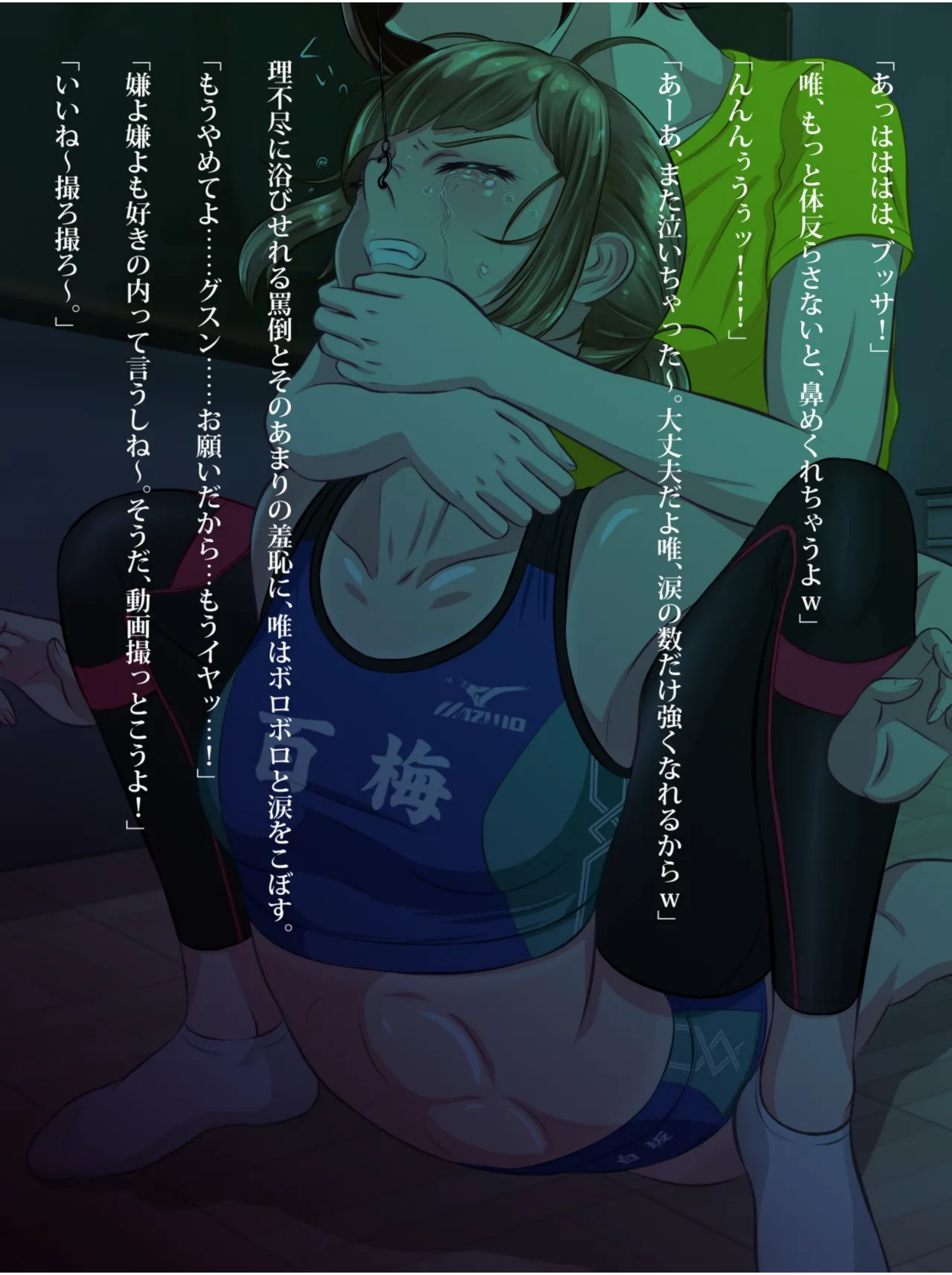
「ほら、キャプテン、これ何かわかる？」

痛みに苦しみながらもなんとか目を開き、その小さな物を見た瞬間、唯は愕然とした。

その手に握られていたのは、シンプルな形をした鼻フックだった。

「い、いやッ……お願いだからそんな物使わないで…やめて……ンッ…んんぅ！！！」

くいっ
MIZUNO
百梅



「あっははは、ブッサ！」
「唯、もっと体反らさないと、鼻めくれちゃうよw」
「んんんぅぅぅッ！！！」
「あーあ、また泣いちゃった～。大丈夫だよ唯、涙の数だけ強くなれるからw」
理不尽に浴びせれる罵倒とそのあまりの羞恥に、唯はボロボロと涙をこぼす。
「もうやめてよ……グスン……お願いだから…もうイヤッ…！」
「嫌よ嫌よも好きの内って言うしね～。そうだ、動画撮っとこうよ！」
「いいね～撮ろ撮ろ～。」

百梅
MIZUNO

「超ウケる～w唯の綺麗に整った顔が豚みたいに醜くなってるよ。」

容姿にも気を遣っている唯にとって、この仕打ちはあんまりだった。しかも同性の前で、こんな顔を晒すなんて――――。

女性のオシャレには2パターン存在する。男性受けを狙ったオシャレと、女性受けを狙ったオシャレ。唯は後者だった。その為、同性からの人気も高かった。唯自身も女性からの目線を強く意識していた。それなのに、今は鼻を引っ張り上げられて、その姿を動画で撮影されている。それも昨日まで仲間だと思っていた、同じ陸上部の女性達に。

するとそこへ、顧問の平田がやってきた。
「おい、お前達、まだこんな所にいるのか～？」
「あ、先生ちょうどよかった～。今ね、新キャプテンのお祝いしてるの。」
「せ、先生……助けて。」
「あぁ、白坂か。おぉ、ホントだ。いい顔してるじゃないか。」
平田は助けるどころか、沙耶香達に注意もしない。
「キャプテンになってあたし達に言うこと聞いて欲しいから、今日はなんでも言うこと聞くんだって。」
「ほ～、それは頼もしいな！さすが俺が見込んだだけのことはある。」
そう言いながら、平田はそそくさとジャージを脱ぎ出した。
「先生……っ……！？」
「まさか顧問の言うことは聞かないなんて言わないよな、白坂。先生の前で正座だ。」
平田はさぞ当たり前かのように、唯に命令を下す。沙耶香達は唯から離れ、平田に鼻フックを手渡した。

「どうした？早く先生の前に来て正座するんだ、白坂。」

「どうして沙耶香達を注意しないんですか！こんなのおかしいよっ！！」

「唯、今日はあたしの気が済むまで言うこと聞くんでしょ？だったら先生の言うことも聞きな。これ命令だから。」

「そんな……」

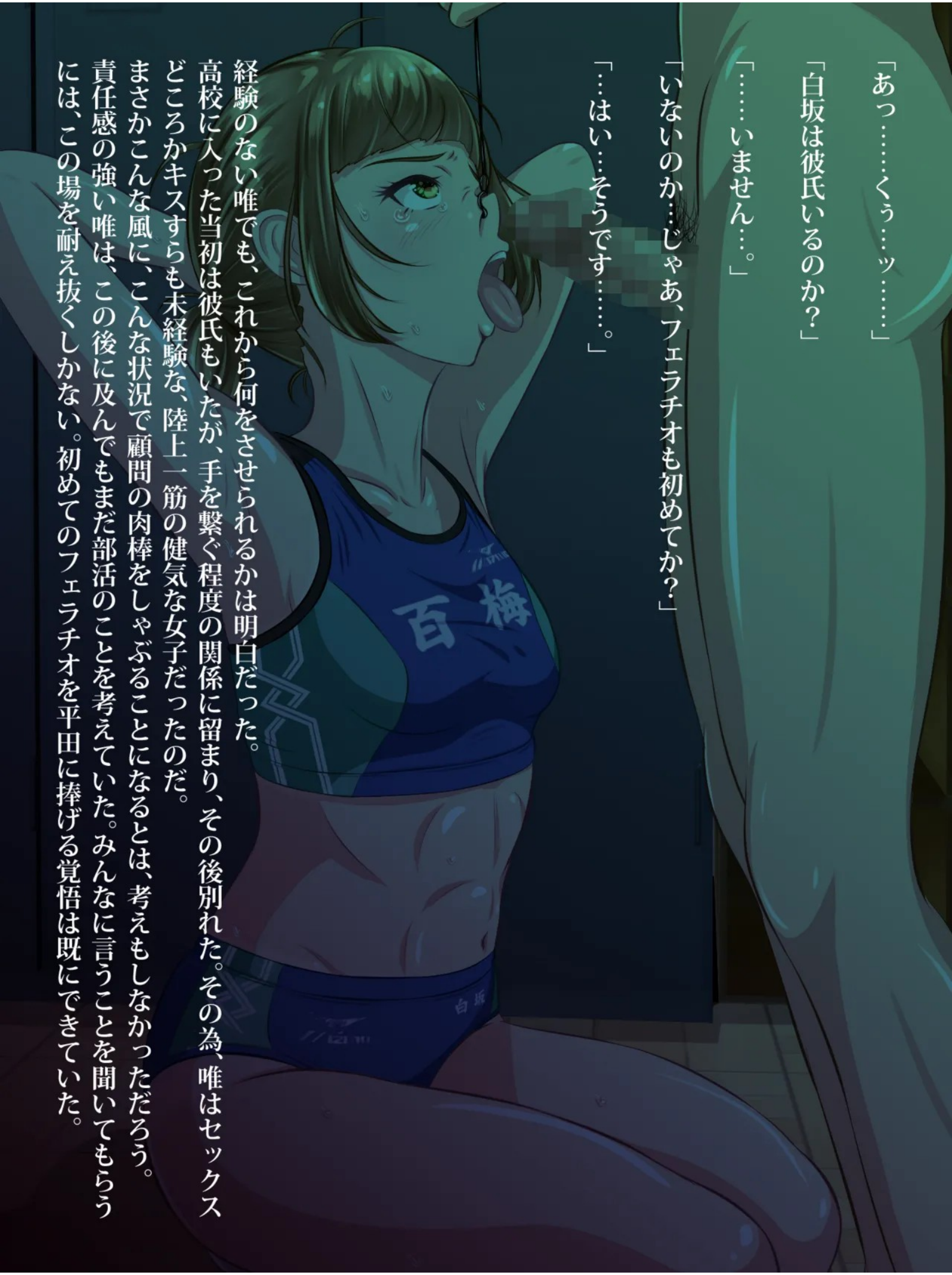
「そんなもヘチマもないだろう。顧問の言うことが聞けないキャプテンがいるか？さっさとしろ、白坂。」

唯は到底納得が行かなかったが、これも部の為だと自分に言い聞かせ、平田の前に跪いた。目の前には、平田のいきり立った肉棒が突き付けられた。

「手は頭の後ろだ。そう、いい子だ。そのまま舌を出せ。」

従順に言うことを聞かざるを得ない唯の鼻に、フックが掛けられた。

百梅
白坂



「あっ……くぅ…ッ……」

「白坂は彼氏いるのか？」

「……いません…。」

「いないのか…じゃあ、フェラチオも初めてか？」

「…はい…そうです……。」

経験のない唯でも、これから何をさせられるかは明白だった。
高校に入った当初は彼氏もいたが、手を繋ぐ程度の関係に留まり、その後別れた。その為、唯はセックスどころかキスすらも未経験な、陸上一筋の健気な女子だったのだ。
まさかこんな風に、こんな状況で顧問の肉棒をしゃぶることになるとは、考えもしなかっただろう。
責任感の強い唯は、この後に及んでもまだ部活のことを考えていた。みんなに言うことを聞いてもらうには、この場を耐え抜くしかない。初めてのフェラチオを平田に捧げる覚悟は既にできていた。

「よし、咥えろ。俺が優しく教えてやる。」

百梅
白坂

「んっ……んふっ…」

「よーし、そうだ。そのままゆっくりと頭を動かせ。お前らもしっかり聞いておけよ。」

まるで陸上競技を指導するかのような口ぶりで、平田はフェラチオの講義を始めた。

「そう、なるべく歯が当たらないように、舌全体でチンポを支えるイメージだ。唇も有効に使えよ。」

「んふっ……ンッ……んんぅ…んぐっ……」

「そう、重要なのは鼻から漏れる声だ。白坂はなかなかいい声を出す。よくAVなんか見ていると、手を使いながらフェラをしているが、あんなモノは必要ない。ノーハンドフェラの方が声は出やすいぞ、覚えておけ。」

「先生、手は縛らないの？」

「あぁ、もちろん縛るのもありだな。縛ると強制感が増す。今回のように頭の後ろで組ませたり、自分で手の動きを制限させると、今度は屈服感とか征服感が増す。無理矢理な感じを出したければ縛ればいいし、征服感を味わうにはこういう屈服のポーズもいいと思うぞ。まぁ、お前らはしゃぶる側だから、どっちがいいのかはわからんがな。」

「あたしはこのポーズやだな～。ワキ全開とか、超恥ずかしくない？」

「わかる～。ワキって見られたくないよね。」

「そう、このポーズにはそういう羞恥心を煽る効果もある。ましてや今回は鼻フック付きだからな。どうだ白坂、恥ずかしいだろ？」

唯は目にいっぱいの涙を為、黙々とフェラを続ける。同性達が見守る中、ワキを晒し、鼻フックされ、顧問の肉棒をしゃぶる。唯にとっての初めてのフェラチオは、あまりにも恥辱に満ちた内容だった。

「ンッ……ジュプッ……んふっ……」

「今の音も大事だな。涎をいっぱい使って、しっかりと吸い付きながらしゃぶるといい音が出るぞ。覚えておけ。よし、誰かちょっと手伝ってくれるか？白坂のブラトップを上にズラしてくれ。」

「は～い、了解で～す。」

「ん、んンッ！？」

白坂

唯のトップスは簡単に捲り上げられ、やや小振りのおっぱいがプルンと顔を出す。その先にはまん丸く固まった乳首が光沢を放っていた。

「先生、唯の乳首ってエロくない？」

「おおぉ、これは立派な乳首だな。胸のサイズも大き過ぎず小さ過ぎず、ちょうどいいサイズだ。」

「だって～唯。嬉しい？先生も褒めてくれてるじゃんw」

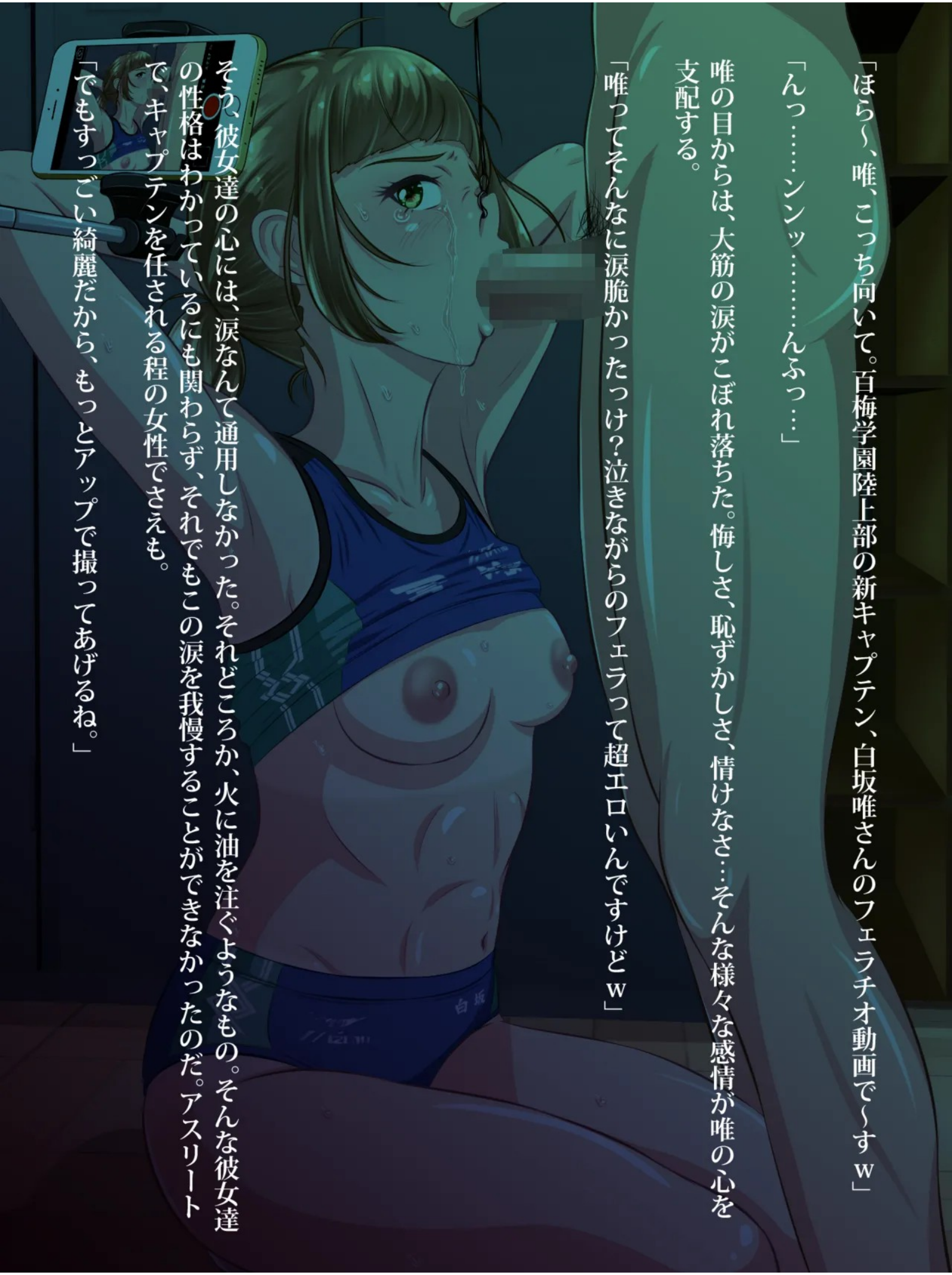
「んふっ……ンッ…んぐっ……ジュプッ…ンッ…！」

唯は顔を赤らめ、耳まで真っ赤にしながらも、平田の肉棒をしゃぶり続けている。唯の色艶のいい乳首や乳輪は、部員達のお気に入りだった。

「ホントにエロい乳首だよね。そうだ、フェラも動画撮っといたら？」

「あぁ、そうだね。唯の記念すべき初フェラだもんね！」

白坂



「ほら〜、唯、こっち向いて。百梅学園陸上部の新キャプテン、白坂唯さんのフェラチオ動画で〜すw」

「んっ……ンンッ……んふっ…」

唯の目からは、大筋の涙がこぼれ落ちた。悔しさ、恥ずかしさ、情けなさ…そんな様々な感情が唯の心を支配する。

「唯ってそんなに涙脆かったっけ？泣きながらのフェラって超エロいんですけどw」

そう、彼女達の心には、涙なんて通用しなかった。それどころか、火に油を注ぐようなもの。そんな彼女達の性格はわかっているにも関わらず、それでもこの涙を我慢することができなかったのだ。アスリートで、キャプテンを任される程の女性でさえも。

「でもすっごい綺麗だから、もっとアップで撮ってあげるね。」

白坂

手元のリモコンでズームすると、ディスプレイ一杯に唯のフェラ顔が映し出される。

「うわ～、なんかめっちゃエロいんですけどぉ！マジAVみたいw」

「これは今日来てないメンバーにも見せなきゃね。」

「唯のクラスの子達にも見せてあげたいわw」

「んんぅ！んふっ……ンンッ！」

否定しているのか、唯は咥えながら大きめの声を出す。鼻フックで引っ張られている為、口から肉棒を放すことはできないのだ。そしてその声は、平田の性器を刺激する。

「あぁ、いいぞ～白坂。その調子でもっと声を出していけ。」

鼻フックを握る平田の手にも力がこもる。唯の頭の動きに合わせて、平田も腰を動かし始めた。そろそろイキそうのようだ。

「よ～し、上手だぞ～白坂。そのまま俺の腰の動きに合わせてついてこい。」

「ンッ……ンッ……んふっ……ンッ……！」

どんどん速くなる腰の動きに、唯は必死に食らいついていった。

そして――。

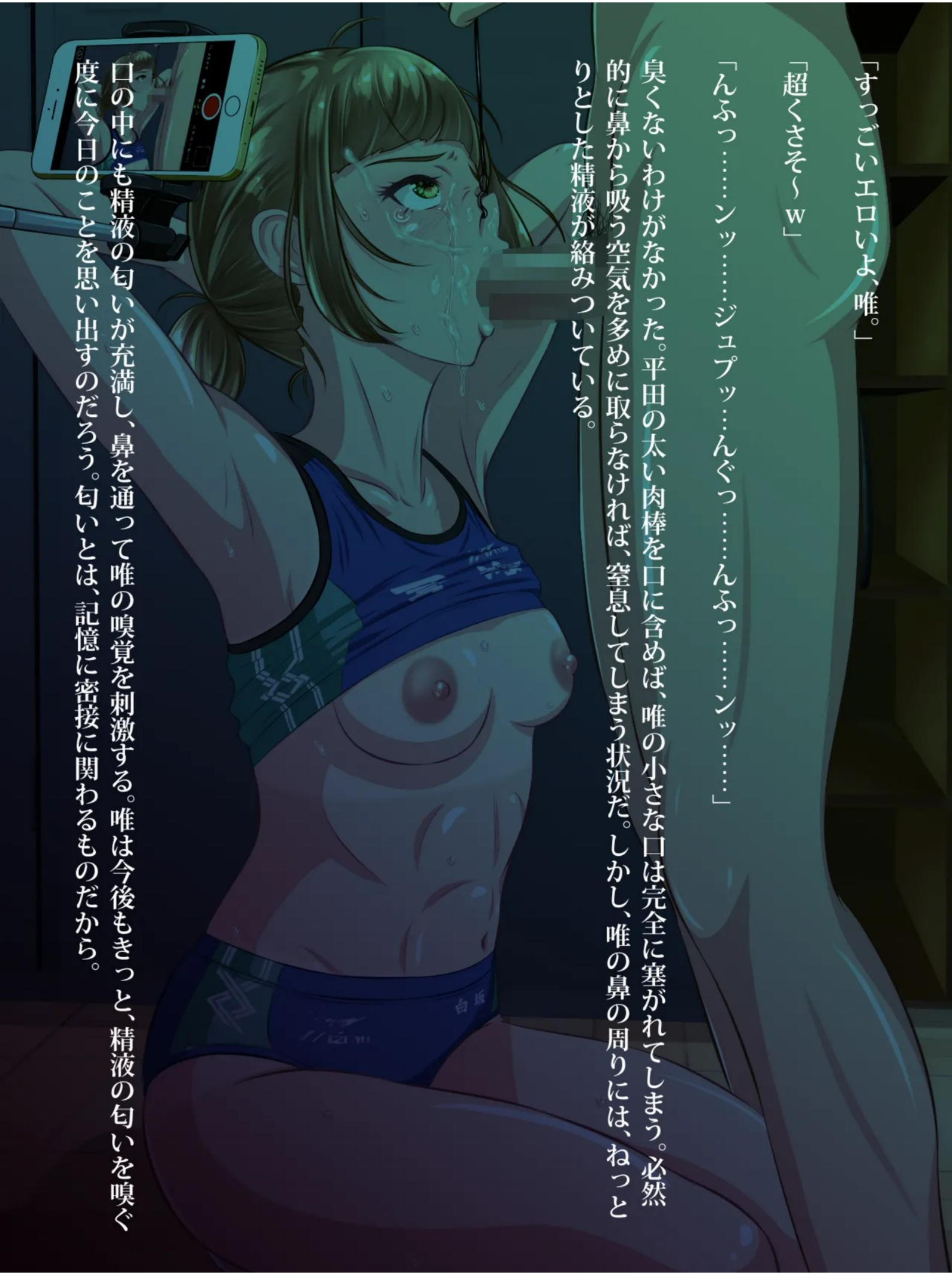
「あぁ…イクッ……白坂、舌を出せ！」

「ッハァ……ンハァ…ッ…」

白坂

「あっははは、先生下手くそwほとんど舌に乗っかってないし。」
「あ、あぁ…気持ちよ過ぎてな。ついつい勢いよく出ちまった。」
「鼻にも付いちゃってるしwくっさそ～。どう？唯。臭い？」
「あ……ッ…ハァ……んっ……く、臭い……」
初めて嗅ぐ、精液の匂い。その鼻はクンと引っ張り上げられ、臭気の入口を広げられている。むせ返る程の匂いを放つ平田の精液は、今回のフェラと共に、しっかりと唯の脳裏に焼き付いた。
「よし、最後は仕上げだ。もう一度綺麗に舐め取れ。お掃除フェラだ。」
「……うっ……は、はい……」
消え入りそうな声で返事をすると、べっとりと精液がかけられたままの顔で平田の肉棒を再び咥えた。

白坂



「すっごいエロいよ、唯。」

「超くさそ～w」

「んふっ……ンッ……ジュプッ…んぐっ……んふっ……ンッ……」

臭くないわけがなかった。平田の太い肉棒を口に含めば、唯の小さな口は完全に塞がれてしまう。必然的に鼻から吸う空気を多めに取らなければ、窒息してしまう状況だ。しかし、唯の鼻の周りには、ねっとりとした精液が絡みついている。

口の中にも精液の匂いが充満し、鼻を通って唯の嗅覚を刺激する。唯は今後もきっと、精液の匂いを嗅ぐ度に今日のことを思い出すのだろう。匂いとは、記憶に密接に関わるものだから。

「よーし、じゃあそろそろ百梅学園陸上部の伝統行事を始めるか。」
「え？伝統行事って何？聞いてないんですけど～。」
興味津々と言った感じで、沙耶香は身を乗り出して平田に伺いを立てる。
「なんだ、お前ら知らないのか？てっきり知っているのかと思ったよ。この百倍学園陸上部にはな、代々伝わるキャプテン就任の儀式があるんだよ。」
「え？マジ？知らなーい。あたしたちはただ唯で遊んでただけだからwってか唯は知ってたの？」
「知らないよ、そんなの……先生、儀式って一体何なんですか？」
沙耶香とは対照的な不安げな表情を浮かべながら、唯は平田に聞いた。
「お前まで知らないのか、白坂。加藤からも聞かされてないのか？」
加藤は唯の一つ上の学年で、昨日まで部を引っ張ってきた前キャプテンだ。
「何も聞いてません…加藤さんもその儀式…受けたんですか？」
「受けるも何も、これをやらないとキャプテンにはなれんからな。というより、キャプテンに選ばれた以上は、その者に拒否権はない。それが伝統ってやつだ。」
もっともらしいことを言いながら、平田は何やら準備をし始めた。

「お前らにはアシスタントをやってもらうが、無闇矢鱈と言いふらしたりするのはやめろよ。場合によっては部の存続に関わるからな。特に今はＳＮＳの時代だから、意図しない形で拡散されても困る。充分に気を付けるんだぞ、いいな。」

「はーい。でも動画撮るのはいいでしょ？」

「まぁ、その辺りの所を気を付けるって約束できるなら、許可は出すが。」

「あー、だいじょぶだいじょぶ。ウチら鍵垢もあるし。」

平田と沙耶香の無機質な会話が響き、唯の心は不安が広がっていく。ただ一つ救いだったのは、加藤も経験したという事実だった。唯の知る限り、加藤はとても真面目で、間違ったことは許さないという正義感を持った女性だ。そんな彼女も経験したことなのであれば、或いは…。

しかし、平田が準備している物が何かわかった瞬間、唯の頭の中は真っ白になった。

「せ、先生……それって…」

「ん？ああ、牛乳浣腸だ。これで新キャプテンのユニフォームを清めるんだよ。」

唯は唖然としたまま、言葉を失った。そんな唯を尻目に、沙耶香は目を輝かせながら言った。

「え？え？浣腸した牛乳で清めるってこと？？何そのマニアックなお清めｗマジ草なんだけどｗ」

「よし、いいぞ。じゃあ白坂はここで四つん這い、みんなは白坂を抑えてくれ。」

そして、百倍学園陸上部の伝統行事『ユニフォームお清めの儀』が始まった。

IINE

「こんなデッカい浣腸器、初めて見たw」
「そうか？これくらいはプレイで使うには一般的だぞ。よ～し、白坂、入れるぞ～。」
唯は俯きながら、既に泣いていた。キャプテンの宿命、歴代の先輩方も通ってきた道。頭には加藤の顔が浮かぶ。昨日も一緒に大会に出て、夜は食事会で他愛のない話もした。そんな加藤にも、こんな過去があったのかと。あの笑顔の裏に、こんな儀式が行われていたのかと。
「それにしても、なんで白坂はユニフォーム着てたんだ？お前ら全員知らなかったんだろ？」
「ウチらもキャプテン就任のお祝いしてたからさ、そういう時ってユニフォームじゃん？壮行会とか。」
「なるほど、じゃあ本当にたまたまだったんだな。上の奴らも、白坂では耐えられないと思って言わなかったのかもな。」
「え～、でも唯は優秀だよ？こんなことくらいで負けないっしょ。ねぇ、唯？」
「ん゛んんぅう、ンンン゛！！！ッ！！！」
「ほら、『うん』だってw」
唯の苦しみなど嘲笑うかのように、牛乳は唯のお尻の穴から腸へと注がれていく。沙耶香は興味津々な顔つきで、唯のお尻を覗き込む。
「どのくらい入るんだろ？ギリギリまで入れてね、先生。」

「まぁ、だいたいこの浣腸器二本分くらい入れれば充分だろう。」
「へ～、結構入れるんだね。唯、どんな感じ？」
「うっ…くっ……苦しい……ッ…お腹痛いよ……グスンッ…」
沙耶香達に押さえ込まれている以前に、浣腸の違和感が唯の動きを制御していた。これも初めての経験で、少しでも動くと出てしまいそうな感覚に襲われていたのだ。脂汗だけが唯の体を伝う。
「え、でもさ、これまさかここで出すとかじゃないよね？」
「おいおい、部室での噴射は勘弁してくれよ、白坂。」
「トイレに……行かせて…先生、もう入れないで……無理です…ッ…！」
「そうだな、これくらい入れれば充分だろう。」
「やだ～、ドキドキしてきたぁ♪どこでさせる？」
「臭そうだし、外のトイレとかでよくね？」
「だなwじゃあ唯、途中で漏らしたら困るからさ、スパッツ穿きなよ。んでスパイク履いて準備しな。」
唯にはもう、あれこれ考えている暇も、抵抗する余裕もなかった。沙耶香に言われた通りにスパッツを穿き、スパイクを履いて外のトイレに向かう。

百梅

一番最初に歩き出した唯だったが、お腹の違和感のせいで歩くこともままならず、気付けば沙耶香達から数メートル後ろを歩いていた。

「うっ……くっ……ダメ、こんな所で……トイレまではなんとか耐えないと……ッ…！」

「唯ぃ～、早くしなよ～！」

先の方から、沙耶香の急かす声が聞こえる。気持ちは焦っても、体が焦らせてくれない。どちらにしても、唯に訪れる結果に大差がないのは明白だった。唯の思いは一つ、このまま漏らさずトイレまで辿り着くことだった。

必死の思いでなんとかトイレに辿り着くと、沙耶香は入口を塞ぐように立っていた。
「遅すぎだよ、唯。もうヤバいんじゃない？」
「……もう限界…ッ……早く中に……！」
「甘いよ。ね、先生？」
「ああ、キャプテンの道は茨の道だ。それをもっと体に叩き込んでやる。」
沙耶香は平田に粘着テープを手渡した。
「可愛い色でしょ？この前百均で見つけたの～。」
「白坂によく似合いそうな色じゃないか。」
そう言って動くこともままならない唯の体を、そのピンク色の粘着テープで縛り始めた。
「ちょ、ちょっと先生、何を……んっ…んんぅ、んむぅうッ！！！」

後ろ手・膝・足首と縛られ、胸の上下も挟むように縛られた唯は、トイレの地面に横たわっていた。
更に口にもピッタリと粘着テープが貼られ、身動きも声を出すことさえも塞がれてしまった。
「ほら、目の前に便器あるじゃん。頑張って移動しなよ。芋虫みたいにさw」
「んんぅぅぅぅ、んむぅぅッ！んふぅ！！」
もう無理だと言わんばかりに、唯は首を左右に振りながら呻く。強烈な便意は、すぐそこまで来ていた。
――少しでも動けば、出る。
「ちょっと唯、こんな所で出さないでよ？そこに便器あるんだからさぁ。」
沙耶香は悪戯に唯を追い詰める。わざと便器に届きそうな所で寝かせ、その苦悩を楽しんでいるようだ。
「ンンッ……ンッ……んふっ……ん　んむぅぅぅぅ！！」
声にもならない声を上げ、唯は苦渋の表情を浮かべる。
「そろそろ出るぞ。スパッツを下ろしてやれ。その方が派手に飛び散る。」
「りょうか～い♪唯のプリ尻見せてね～w」

穿き慣れた少し小さめのレーシングブルマに包まれた、唯の丸いお尻。漏れないよう、肛門をキツく締めながらここまで歩いてきたからか、レーシングブルマは随分と食い込んでいた。

「なんかさぁ、もう臭そうなんだけどw」

「わかりみw」

唯を囲うようにして、顧問の平田と沙耶香他部員達は噴射の時を待ちわびる。

「過度な我慢は体に負担を掛けるぞ、白坂。」

「そうそう、どっちにしたって漏らすんだから、さっさと出しちゃいなよ。」

呆れ顔で沙耶香は言う。元親友からの突き放されたような言葉に、唯の心は一気に崩れた。

「んぅ、んんんぅぅぅぅ――――ッ！！！！！！」

「うっわ、すっごw」

「汚ったねぇ、てかくさっ！！」

「あっはははは、マジウケるwブルマが清まってよかったねぇ、唯w」

「……うぅ……ッ……んっ……んむぅっ……！」

これまで、唯の記録を支えてきたと言っても過言ではない、大切なレーシングブルマ。やっとこれから、更なる活躍に向けて新しい第一歩を踏み出そうとしていた矢先の悪夢。

このユニフォームを着て、もっと記録を伸ばしたかった。

キャプテンの名に恥じぬよう、努力を重ねるつもりだった。

でも、もうできない。

大切なレーシングブルマが、親友や仲間・顧問の手によって汚(けが)されてしまったのだから。

「よ～し、今日は解散！」

「先生、唯はどうすんの？」

「そのままに決まってるだろう。これくらいのトラブルは自分で回避できないでどうする。」

「ふ～ん、そうなんだ。じゃ、お先ね～唯。頑張って抜け出さなきゃ、誰か来ちゃうよ。」

「あっははは wこんな姿誰かに見られたら、私生きていけないわ～。じゃあね、唯。」

「マジ無理～～ wじゃ、お疲れ～、唯。すんごいくっさいから、ちゃんとシャワー浴びなね。」

そして唯はトイレの中に取り残された。

牛乳にまみれたユニフォーム姿のままで。

百梅学園陸上部に代々伝わる伝統行事、『ユニフォームお清めの儀』。
浣腸で牛乳を流し込み、その噴射によってユニフォームを清めるという儀式。
その儀式によって清められたユニフォームを身に纏(まと)ってこそ、真のキャプテンと認められる。
またの名を『ロスト・ユニフォーム』。
この儀式に耐えきれず、陸上部を去る者も少なからず存在した。
ユニフォームを奪われし者、その後、姿を現さず。
今回の唯もまた、『ロスト・ユニフォーム』の経験者として、表に出ない名簿に名を連ねたのだった。

ロスト・ユニフォーム～陸上部編～　終

企画・制作　二次元スタジオ BLACK★BASE

【8月21日(水)】

それが彼女にとって「青天の霹靂」であったことは、容易に想像がつく。

人柄も良く、見た目も華やか、スポーツも万能で、それでいて頭も良い。

才色兼備とは彼女の為に用意された言葉と言っても良い程、人も羨む存在だった。

そう、昨日までは……。

【8月20日(火)】

彼女は陸上部に所属していた。
種目は短距離と走り幅跳びで、常に先輩を脅かす程の記録を出していた。
その力は大きな舞台であればある程発揮され、この日も大会最終日、百梅学園の陸上部として最後まで競技を続けていたのは、彼女一人だけだった。

彼女の名は、白坂唯(しらさか ゆい)。
今時の女子でありながら、しっかりした考えを持った頼れる存在として、周りからの信頼も厚かった。
次期キャプテンは、彼女以外に考えられない。
顧問はもちろん、引退を控えるメンバーにとってもそれは同様だった。
ただ、人間の中で最も醜い習性が、彼女を地獄へと突き落とすこととなる。

同学年からの「嫉妬」だ。

その時は、刻一刻と彼女に迫っていた。

二スト オブ 陸上部編

全ての競技が終わり、唯の最終結果は走り幅跳びで五位入賞。来年度に期待が膨らむ内容だった。

その夜、先輩達の送別会も兼ねた食事会が開催されたのだが、その場も彼女の話題で持ち切りだった。顧問を除いては全員女子だけの世界。時折飛び出す今時女子の恥知らずな言動には顧問もタジタジだったが、このチームの仲の良さが伺えるひとときだった。

唯も話題の中心となりながら、時には別の話題を振ったりと、上手にその場の空気を読みながら食事会の雰囲気を作っていた。

みんな笑顔で、とても良い送別会となった。

その会の締め括りとして、顧問の平田は引退する部員一人ひとりに熱いメッセージを送る。

時折鼻をすする音が聞こえ、感動のシーンもクライマックスを迎えた。

そして最後に、部員全体へ言葉を投げ掛ける。

「今日で引退する者も、明日から主役になる者も、それぞれの思いと思い出は一つだ。しっかりとバトンで受け渡しできているよな？重要なのはバトンを受け取った方。いいな、白坂。そのバトンはお前達の代でしっかりと育てて、また次の代に継承していくんだ。先輩達の思いを無駄にするようなことだけはするなよ、いいな！」

「はいっ！」

唯の返事はその場に響き渡る程の、とても気合の入った理想的な返事だった。

（クスクス…）

その返事とは裏腹な黒い嘲笑がその場の片隅から起こっていることに、唯はまだ気付いていなかった。

そして、彼女の運命は翌日、急激に下降線を辿ることとなる。

【8月21日(水)】

「あれ…？やっぱりないなぁ。ユニフォームなんて失くすわけないのに。」

唯は部室のロッカーの前で怪訝な表情を浮かべていた。昨日、家に帰った後でユニフォームを洗濯に出そうとした時、バッグにユニフォームが入っていないことに気が付いた。
その時も不思議に思ったのだが、もしかしたら部室のロッカーに置き忘れてきたのかもしれない、というよりもむしろそれ以外は考えられないと思い、そこにユニフォームがあることを前提としてロッカーを開けた結果、ユニフォームは見当たらなかった。

「やっぱりバッグに入れたよね。なんとなく覚えあるし。あとで沙耶香達にも聞いてみようかな。」

練習の時にはユニフォームは使わない為、今日の練習に影響が出るわけではなかった。
とりあえず練習用のTシャツとスパッツに着替え、グラウンドに出てウォーミングアップを始めることにした。

Soar,
like a
petal.

朝の天気予報では、今日は猛暑日の予報だった。
まだ午前中ではあるが、気温は既に三十度を超えていた。
ストレッチをしただけでも汗ばみ、既にTシャツやスパッツには汗が滲み始めていた。

Soar,
like a
petal.

「今日もヤバそうだな。水分補給は念入りにしとかないと。」
いつものルーティーンをこなし、走り始めた所で唯はふと思った。
（今日はみんな遅いな…。）
唯はユニフォームが気になっていた為、いつもより早く家を出たのは間違いない。
それにしても、そろそろ誰か一人くらいグラウンドに出てきても良い頃だ。
そんなことを考えているうちに、ジョギングもいつもの周を走り終えていた。

「ハァ…ハァ……みんな遅いな…部室行ってみようかな…ハァ…マジ暑いな今日…ハァ…ッ…」

唯のウォーミングアップは、他の部員に比べても念入りで、時間も長い。
その為、大体ジョギングをしている間にはみんな揃っているのがいつもの流れだった。
陸上は基本的に個人競技の為、それぞれが個人的な練習メニューを組んで行動することが多い。
顧問も比較的放任主義であり、部のことはキャプテンに任せ、練習に顔を出す時もまばらだった。

日本特有の体にまとわり付くようなジメジメとした蒸し暑さに、唯は既にかなりの汗をかいていた。
クールダウンさせるように、ペットボトルの水を少し口に含む。

「ふぅ…よし。ちょっと部室戻ってみよう。」

唯は少なからずの不安を抱えながら、部室へと向かった。

ドアを開けると、沙耶香を中心に数人の部員達が談笑していた。

「なんだ、来てたんだ。もう時間過ぎてるよ？」
しかし、誰も唯の言葉には反応せず、談笑を続けている。
その声に覆い被せるように、大きめの声で唯は言った。
「ねぇ、もう練習始める時間だって！」
すると沙耶香が立ち上がり、唯の目の前まで近付いてきた。
そして鼻先が触れるか触れないかの所まで顔を寄せ、やや下から鋭い眼光を突き付けて言った。
「何なの？もしかしてもうキャプテン気取り？」
「そ、そんなつもりじゃないけど…やらないの？練習。」
「アンタの下で部活する気になんてなれないんだよね、あたし達。」
「な、何よそれ……昨夜の先生の話、忘れたの？」
「だってあれ、アンタに言った内容でしょ？返事したのも唯だけだったじゃん。先生も白坂って名指しで言ってたし。」
周りの部員達も、そうだそうだと言わんばかりに頷いている。

「ちょっと何さっきから屁理屈ばっか言ってるのよ…いきなりどうしちゃったの？」

「いきなり…？バカじゃない？ずっとだよ！」

その言葉をきっかけに、唯の頭の中は混乱し始めた。
昨日まで親友だと思っていた沙耶香をはじめ、他の部員達も自分のことを敵視している。
しかもそれは今に始まったことではなく、目の前の沙耶香は「ずっと」だと言う。

「あのさ、わけわかんないんだけど…今までのことは何だったの？ずっと一緒に練習頑張ってきたじゃん！もうすぐ私達の時代だねって、気合い入れてたじゃん！」

「でも、アンタの下になるとは言ってないよね？」

「私がキャプテンになるのが気に入らないの？だったらキャプテンなんて辞退するし、そもそもまだ選ばれたわけじゃないし。」

「フン、どう考えたってキャプテンはアンタでしょ。辞退？カッコ付けんのもいい加減にしなよ！」

「だったらどうすればいいのよ…」

沙耶香は右の口元をニヤリと吊り上げ、唯に告げた。

「そうねぇ…土下座でもしてもらおっかな。」

「ど、土下座って…本気で言ってるの…？」

「この状況で冗談言ってるように思う？大マジだよ。わかるでしょ？」

「……土下座したら、練習に出てくれるのね？」

「アンタの土下座見てから決める。」

唯はその言葉を信じて、沙耶香の前で跪いた。

Soar,

「ほら、何て言うの？そのくらい自分で考えなよ。」
唯は言葉が出てこなかった。それもそのはず、何を謝れば良いのかも理解できていないのだ。
それでも唯は必死に言葉を絞り出した。
「……ごめんなさい…」
「…は？それだけ？何なのその小学生レベルの土下座は。」
「だって…そんなこと言われても……」
――悪いことは何もしていない。
だが、察しのいい唯は、これ以上は言わない方が身の為だと感じ、口を噤(つぐ)んだ。
「自分で考えなさいよ。どうしてこうなったのか。」
それは物凄く理不尽な要求だった。全く身に覚えのない唯に対し、無理矢理罪の意識をなすり付けようとしているのだ。まるで刑事ドラマによく見る自白を強要するワンシーン、もちろん冤罪だ。
唯は歯を食い縛りながらも、沙耶香の気持ちを必死に探った。沙耶香は何に対して怒っているのか、何が気に入らないのかを……。
「まだキャプテンに選ばれたわけでもないのに…その気になって張り切ってて…嫌な気にさせてごめんなさい……」

ガリ

「……っ！？」

「まぁその答えも丸っ切り間違いなわけじゃないけど…わかってないね、唯。」

唯はこれまでの人生の中で、親からも愛され、周りの誰からも好かれ、憧れの存在として特別視されてきた存在。それが今、親友だと思っていた沙耶香の目の前で土下座をし、頭を踏み付けられている。普通の人間でも屈辱的であるのに、唯からしたらこの仕打ちは耐え難い程の屈辱だろう。

一方の沙耶香は、あまり家庭に恵まれていなかった。両親は幼い頃に離婚。父親に引き取られ、母親の愛を知らない。父親は不器用な性格から、人一倍仕事をして養うことで沙耶香に愛を伝えてきたつもりだが、まだ若い沙耶香にはその愛情は伝わっていなかった。「お父さんは自分のことを放ったらかしで仕事ばかりしている」というのは、沙耶香の口癖になっている程だった。

そんな沙耶香の目には、唯の姿があまりにも眩しかったに違いない。

「アンタがキャプテンになることはさ、みんな納得してるよ。誰よりも頑張ってるし、センスもあるし、仕切る力もある。」

「だったらどうしてこんなことするのよ…」

「出来過ぎなんだよね～、何もかも。"天は二物を与えず"なんて言うけどさ、アンタ一人でどんだけ持ってくのよ。」

唯にはどうすることもできない部分を、沙耶香は責め立てる。

「誰からも愛されて、親からも愛されて、見た目もよくて勉強もできて、部活ではキャプテンって…それあたしに対しての当て付け？」

「そ、そんな…」

「別にいいのよ、キャプテンでも。でもさ～、あたし達に言うこと聞いて欲しかったら、まずアンタがあたし達の言うこと聞くべきじゃないの？」

昨日まで親友だと思っていた沙耶香のあまりにもショッキングな言葉が、唯の胸を突き刺した。
涙が自然と頬を伝う。
「わかったよ……沙耶香の気が済むまで何でも言うこと聞く。」
鼻をすすりながら、擦り切れるような声で唯は言った。

「あっはは、だって。とりあえずさ、筋トレから始めよっか～。」

そう言うと、沙耶香は唯の髪の毛を引っ張り強引に立たせる。そして、いつも自主練の時に使っているベンチプレスへ横たわらせた。

「今日からアンタはキャプテンだから～、60キロね。」

「ちょ、ちょっと待ってよ…そんな重さ、持ったことない！」

「何いきなり口答えしてんの？あたしの気が済むまで言うこと聞くんじゃないの？」

そして沙耶香は他の部員達と共にゆっくりバーベルを降ろし、唯の手に握らせた。

Soar,
like a
petal.

「うっ…くぅ……！」
「お～、すごいじゃん、さすがキャプテン。」
「ホントホント、私だったら絶対無理だもん。」
苦しそうな唯を尻目に、他の部員達は涼しげな顔で談笑を始める。
「60って結構重くね？普通の男子くらいの重さあるよ。」
「だよねー、私も無理だわw」
「わ、私だって無理だよ……お願い、もう降ろして…ッ！」
そんな唯の叫びなど、誰も聞く耳を持たなかった。それどころか沙耶香はその会話を聞きながら、唯の頭の上でニヤニヤと不敵な笑みを浮かべている。
「こ～んな所にいい椅子があるじゃ～ん♪疲れてるから座ろっと。」

Soar,
like a
petal.

「よいしょっと♡」
「ん、んんぅうッ！！？ん……んふっ！！」
「ちょっと唯、鼻息くすぐったいってw」
「んっ…んふぅうッ！！」
「あっはは、沙耶香のケツに唯の顔が埋まってるw」
「沙耶香って意外とお尻大っきいからね～。」
沙耶香は唯の口を塞ぐように座っている為、唯はほとんど声が出せない状態になっていた。
なんとか鼻だけで呼吸はできる状態だったが、その鼻には沙耶香の股間が密着していた。
息を吸うには、沙耶香の股間の匂いごと吸い上げなければならなかった。
「ねぇ唯、そんなにあたしのマンコ嗅がないでくれる？」
「んんぅう、んふっ……んんぅ！」
「鼻の穴大きく広げちゃって…可愛いw」
沙耶香は唯の苦しそうに歪む顔を見下ろしながら、悪戯に微笑む。

「うちらも悪戯しちゃおっか？」

「だなw」

そう言って部員達は顔を見合わせると、ガラ空きになった胸や股に手を伸ばす。
唯は沙耶香の太腿によって視界もほとんど遮られ、手もバーベルで塞がっている。
抵抗など、できるはずもなかった。

Soar,
like a
petal.
MIZUNO
asics

「んふぅぅぅぅ！！！」

「きゃあぁ、ちょっと唯、感じちゃうからやめてってば！」

「あっはははははw」

女子達の高笑いが部室内にこだまする。

こんな状況でも、60キロという重さにも関わらず、バーベルを落とさないのはさすがだと思える。

しかし、残念ながら今日のこの場にそれを褒め称えてくれる人間は一人もいなかった。

それどころか、どんどん追い討ちを掛けるような言葉を投げつけるばかりだ。

「もっと股に力入れなよ。努力は女の又に力って書くでしょ？アンタの好きな言葉じゃん、唯。」

「んふぅ、ンッ……んんんぅぅぅぅ！！！」

「ねぇ、白坂キャプテンのココ、なんか湿ってきてるんですけど～w」

「え？嘘でしょ？マジ練習中に何興奮してんのよアンタ。」

沙耶香はそう言って唯の顔からお尻を上げた。

「キャプテンが筋トレしながらマンコ濡らすってどういうこと？」

沙耶香は唯に詰め寄る。

「筋トレって…こんなのただのいじめじゃない。」

「じゃあ何？いじめられて濡らしたってこと？」

「え、ヤバっ、ドMじゃん。」

どんな言い訳を付けようが、スパッツにまで染みを作ってしまった唯には、弁解の余地はなかった。

「最低なマンコだね…床に寝転んで股広げな。マッサージしてあげる。」

「ほらぁ、横になんなよ。沙耶香に言われたらさっさと動くんだよ！」

髪を掴まれ、腕を引っ張られ、唯は強引に床に押し倒された。

Soar,
like a
petal.

「言っとっけど、マッサージだからね。いじめとか訳わかんないこと言わないでね。」

沙耶香は唯の両足首を掴み、電気アンマを仕掛ける。

唯は腕で顔を隠しながら、その刺激に必死に耐えている様子だった。

「何顔隠してんのよ、こっち見なさいよ。どんな顔して感じてるのか見せて？」

「ほら、顔見せるんだよ！」

Soar,
like a
petal.

「あっはは、何泣いてんの？気持ちよくてたまんない？」
「……最低…っ……ずっと親友だと思ってたのに。」
「それはアンタが勝手に思い違いしてただけでしょ？最低とか言われる筋合いないんだけど。」
これは何かの間違いで、まだどこかで沙耶香を信じたいと唯は思っていた。
いや、信じたいというよりかは、現状が信じられないといった気持ちが強いのかもしれない。
心に大きな傷を負いながらも、唯は涙ながらに訴える。
「二人で…この百梅学園陸上部を引っ張っていこうって言ってたのは嘘だったの？」
「嘘ではないけど…アンタがいればあたしはいらないじゃん？」
「そんなことない！私には沙耶香の存在が必要だった。」
「だからそれはアンタの都合でしょ？悪いんだけどさ、あたしを巻き込まないでくれる？アンタには
あたしの気持ちなんてわからないんだから。」
「そ、そんな……。」
「てかさー、なんか足の裏が生温かいんだけど。まさかまた興奮してる？」

Soar,
like a
petal.

「ねぇ、泣きながら友情論とか語ってさ、マンコまで濡らすのやめてくれない？」
「あっはは、マジウケるw」
「うわっ、マジでさっきよりも染みデカくなってんじゃん。」
そんな言葉達が、唯の心をどんどん傷付けていく。
「沙耶香がグイグイ足で押し付けるから染みが広がっただけでしょ…」
「はぁ？人のせいにしないでよ。だいたい何の染みよ？アンタのマン汁でしょ、それ。」
「くっ……」
唯は何も言い返せなかった。どんな理由があれ、沙耶香の言う通り、濡らしたのは自分だ。
女のツボを的確に責められ、追い詰められ、自分でも意図しない所で体が高揚したのは事実だった。
どうして濡れているのかさえ、唯自身もわかっていなかったのだ。

沙耶香は自分のスポーツバッグの中から何かを取り出した。唯のユニフォームだ。

「なんで沙耶香が持ってるのよ…」

「ん？昨日の食事会の時にこっそり抜いておいた。」

「返して。」

「うん、返すよ。だから今、これに着替えて。」

「なんでよ…洗濯だってしてないし。」

「そんなマン汁の染み込んだスパッツ、見たくないんだよ。キモいから早く着替えて。」

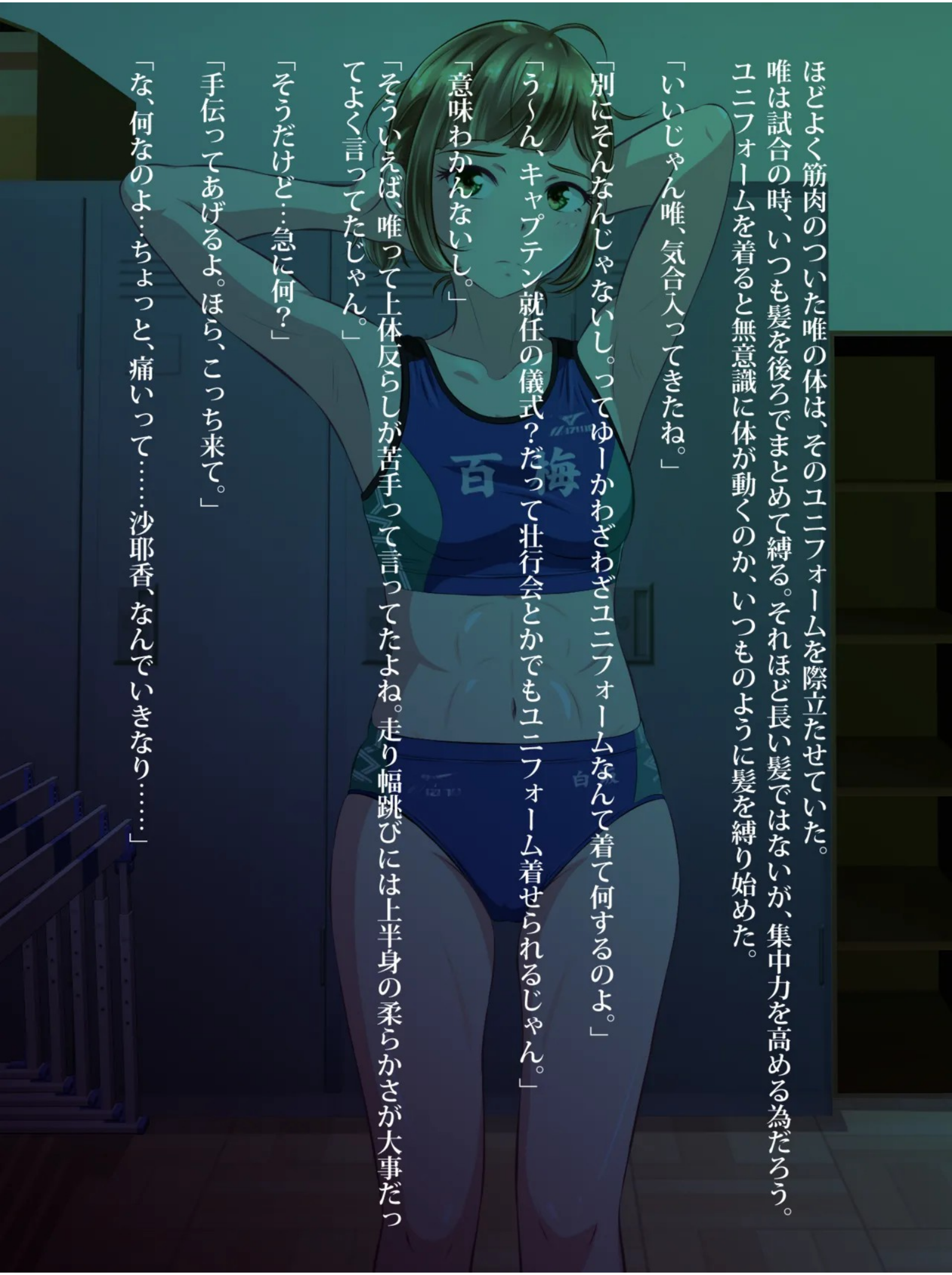
それを言われると、唯には返す言葉がなかった。沙耶香からユニフォームを受け取る。

「あぁ、下着とか全部脱いでね。直でブルマ穿いて。」

唯は沙耶香に言われるがまま、Tシャツ、スパッツの順に脱いでいき、少し戸惑いながらも下着を脱ぎ始めた。ユニフォームで体を隠しながら、ショーツを脱いだと同時にレーシングブルマを穿く。その後、片手で胸を隠しながら、器用にトップスに体を潜らせる。

昨日の大会で5位に輝いたアスリートが、そのままの姿を現した。

百梅
白坂



ほどよく筋肉のついた唯の体は、そのユニフォームを際立たせていた。
唯は試合の時、いつも髪を後ろでまとめて縛る。それほど長い髪ではないが、集中力を高める為だろう。
ユニフォームを着ると無意識に体が動くのか、いつものように髪を縛り始めた。

「いいじゃん唯、気合入ってきたね。」

「別にそんなんじゃないし。ってゆーかわざわざユニフォームなんて着て何するのよ。」

「う～ん、キャプテン就任の儀式？だって壮行会とかでもユニフォーム着せられるじゃん。」

「意味わかんないし。」

「そういえば、唯って上体反らしが苦手って言ってたよね。走り幅跳びには上半身の柔らかさが大事だってよく言ってたじゃん。」

「そうだけど…急に何？」

「手伝ってあげるよ。ほら、こっち来て。」

「な、何なのよ…ちょっと、痛いって……沙耶香、なんでいきなり……」

百梅
MIZUNO

「あぐぅうぅぅ！！」
「ホントだ、唯って意外と硬いわ。」
「くっ…沙耶香、やめて……痛いって！」
「何言ってんのよ、協力してやってんのに。もしかして、昨日の5位で満足してるんじゃないよねぇ？」
「協力って…そんな気なんてないくせにっ……あがっ…！」
「あたしのお姉ちゃん幅跳びやってたけど、こんなモンじゃなかったわよ？ほら、もっと反らしな！」
「あぁあぁぁ…ッ……くっ…もう無理だって……これ以上は上がらない……」
すると沙耶香は他の部員達に指示を出す。
「アンタ達も手伝ってあげて。これ以上無理って言うからさ、あれ持ってきて。」
「りょうか～いw」

そう言ってその部員はニヤニヤと頬を緩ませながら、ある物を持ち出してきた。

「ほら、キャプテン、これ何かわかる？」

痛みに苦しみながらもなんとか目を開き、その小さな物を見た瞬間、唯は愕然とした。

その手に握られていたのは、シンプルな形をした鼻フックだった。

「い、いやッ……お願いだからそんな物使わないで…やめて……ンッ…んんぅ！！！」

くいっ
MIZUNO
百梅

「あっははは、ブッサ！」
「唯、もっと体反らさないと、鼻めくれちゃうよw」
「んんんぅぅぅッ！！！」
「あーあ、また泣いちゃった～。大丈夫だよ唯、涙の数だけ強くなれるからw」
理不尽に浴びせれる罵倒とそのあまりの羞恥に、唯はボロボロと涙をこぼす。
「もうやめてよ……グスン……お願いだから…もうイヤッ…！」
「嫌よ嫌よも好きの内って言うしね～。そうだ、動画撮っとこうよ！」
「いいね～撮ろ撮ろ～。」

百梅
MIZUNO

「超ウケる～w唯の綺麗に整った顔が豚みたいに醜くなってるよ。」

容姿にも気を遣っている唯にとって、この仕打ちはあんまりだった。しかも同性の前で、こんな顔を晒すなんて――――。

女性のオシャレには2パターン存在する。男性受けを狙ったオシャレと、女性受けを狙ったオシャレ。唯は後者だった。その為、同性からの人気も高かった。唯自身も女性からの目線を強く意識していた。それなのに、今は鼻を引っ張り上げられて、その姿を動画で撮影されている。それも昨日まで仲間だと思っていた、同じ陸上部の女性達に。

するとそこへ、顧問の平田がやってきた。
「おい、お前達、まだこんな所にいるのか～？」
「あ、先生ちょうどよかった～。今ね、新キャプテンのお祝いしてるの。」
「せ、先生……助けて。」
「あぁ、白坂か。おぉ、ホントだ。いい顔してるじゃないか。」
平田は助けるどころか、沙耶香達に注意もしない。
「キャプテンになってあたし達に言うこと聞いて欲しいから、今日はなんでも言うこと聞くんだって。」
「ほ～、それは頼もしいな！さすが俺が見込んだだけのことはある。」
そう言いながら、平田はそそくさとジャージを脱ぎ出した。
「先生……っ……！？」
「まさか顧問の言うことは聞かないなんて言わないよな、白坂。先生の前で正座だ。」
平田はさぞ当たり前かのように、唯に命令を下す。沙耶香達は唯から離れ、平田に鼻フックを手渡した。

「どうした？早く先生の前に来て正座するんだ、白坂。」

「どうして沙耶香達を注意しないんですか！こんなのおかしいよっ！！」

「唯、今日はあたしの気が済むまで言うこと聞くんでしょ？だったら先生の言うことも聞きな。これ命令だから。」

「そんな……」

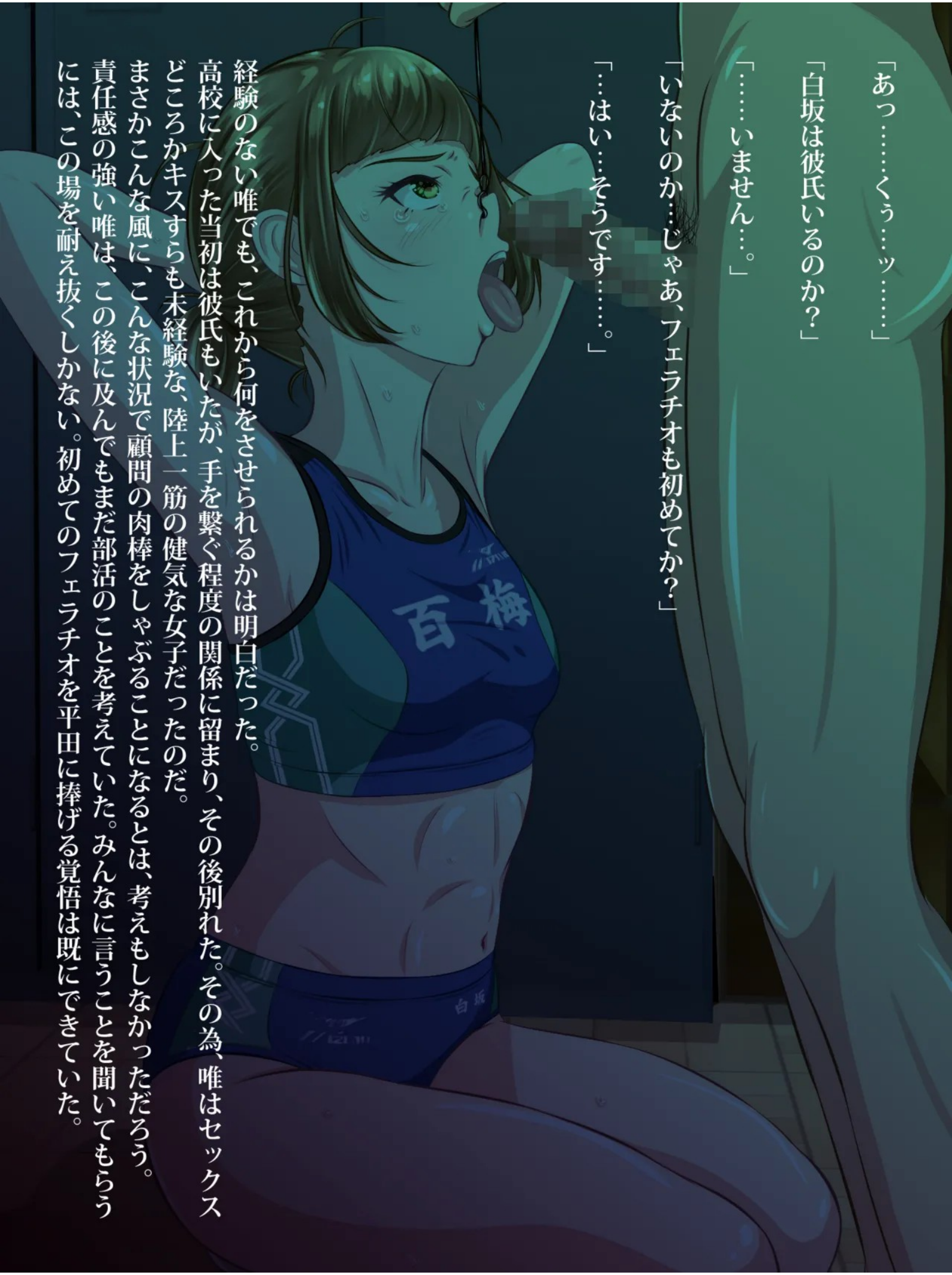
「そんなもヘチマもないだろう。顧問の言うことが聞けないキャプテンがいるか？さっさとしろ、白坂。」

唯は到底納得が行かなかったが、これも部の為だと自分に言い聞かせ、平田の前に跪いた。目の前には、平田のいきり立った肉棒が突き付けられた。

「手は頭の後ろだ。そう、いい子だ。そのまま舌を出せ。」

従順に言うことを聞かざるを得ない唯の鼻に、フックが掛けられた。

百梅
白坂



「あっ……くぅ…ッ……」

「白坂は彼氏いるのか？」

「……いません…。」

「いないのか…じゃあ、フェラチオも初めてか？」

「…はい…そうです……。」

経験のない唯でも、これから何をさせられるかは明白だった。
高校に入った当初は彼氏もいたが、手を繋ぐ程度の関係に留まり、その後別れた。その為、唯はセックスどころかキスすらも未経験な、陸上一筋の健気な女子だったのだ。
まさかこんな風に、こんな状況で顧問の肉棒をしゃぶることになるとは、考えもしなかっただろう。
責任感の強い唯は、この後に及んでもまだ部活のことを考えていた。みんなに言うことを聞いてもらうには、この場を耐え抜くしかない。初めてのフェラチオを平田に捧げる覚悟は既にできていた。

「よし、咥えろ。俺が優しく教えてやる。」

百梅
白坂

「んっ……んふっ…」

「よーし、そうだ。そのままゆっくりと頭を動かせ。お前らもしっかり聞いておけよ。」

まるで陸上競技を指導するかのような口ぶりで、平田はフェラチオの講義を始めた。

「そう、なるべく歯が当たらないように、舌全体でチンポを支えるイメージだ。唇も有効に使えよ。」

「んふっ……ンッ……んんぅ…んぐっ……」

「そう、重要なのは鼻から漏れる声だ。白坂はなかなかいい声を出す。よくAVなんか見ていると、手を使いながらフェラをしているが、あんなモノは必要ない。ノーハンドフェラの方が声は出やすいぞ、覚えておけ。」

「先生、手は縛らないの？」

「あぁ、もちろん縛るのもありだな。縛ると強制感が増す。今回のように頭の後ろで組ませたり、自分で手の動きを制限させると、今度は屈服感とか征服感が増す。無理矢理な感じを出したければ縛ればいいし、征服感を味わうにはこういう屈服のポーズもいいと思うぞ。まぁ、お前らはしゃぶる側だから、どっちがいいのかはわからんがな。」

「あたしはこのポーズやだな～。ワキ全開とか、超恥ずかしくない？」

「わかる～。ワキって見られたくないよね。」

「そう、このポーズにはそういう羞恥心を煽る効果もある。ましてや今回は鼻フック付きだからな。どうだ白坂、恥ずかしいだろ？」

唯は目にいっぱいの涙を為、黙々とフェラを続ける。同性達が見守る中、ワキを晒し、鼻フックされ、顧問の肉棒をしゃぶる。唯にとっての初めてのフェラチオは、あまりにも恥辱に満ちた内容だった。

「ンッ……ジュプッ……んふっ……」

「今の音も大事だな。涎をいっぱい使って、しっかりと吸い付きながらしゃぶるといい音が出るぞ。覚えておけ。よし、誰かちょっと手伝ってくれるか？白坂のブラトップを上にズラしてくれ。」

「は～い、了解で～す。」

「ん、んンッ！？」

白坂

唯のトップスは簡単に捲り上げられ、やや小振りのおっぱいがプルンと顔を出す。その先にはまん丸く固まった乳首が光沢を放っていた。

「先生、唯の乳首ってエロくない？」

「おおぉ、これは立派な乳首だな。胸のサイズも大き過ぎず小さ過ぎず、ちょうどいいサイズだ。」

「だって～唯。嬉しい？先生も褒めてくれてるじゃんw」

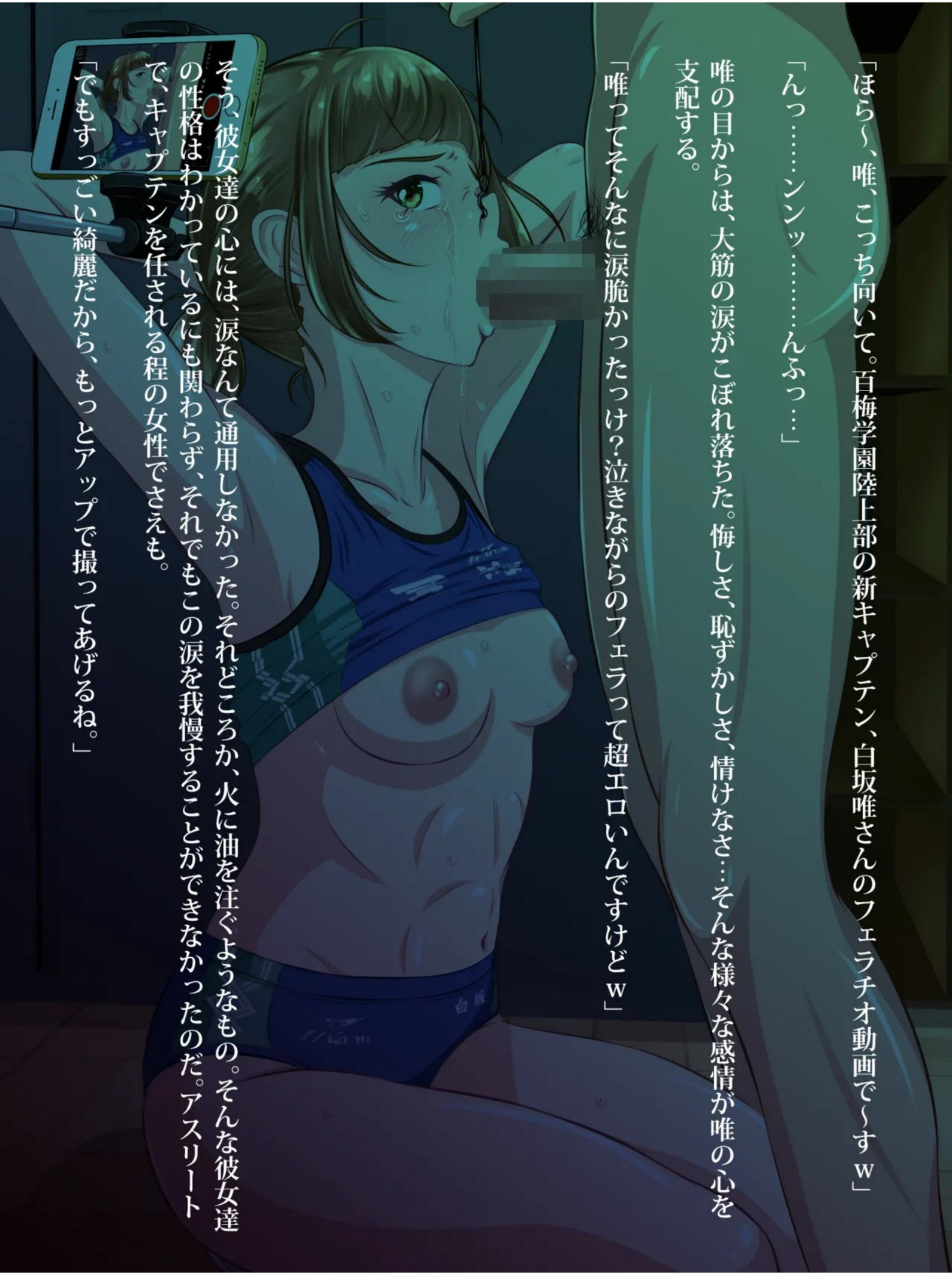
「んふっ……ンッ…んぐっ……ジュプッ…ンッ…！」

唯は顔を赤らめ、耳まで真っ赤にしながらも、平田の肉棒をしゃぶり続けている。唯の色艶のいい乳首や乳輪は、部員達のお気に入りだった。

「ホントにエロい乳首だよね。そうだ、フェラも動画撮っといたら？」

「あぁ、そうだね。唯の記念すべき初フェラだもんね！」

白坂



「ほら～、唯、こっち向いて。百梅学園陸上部の新キャプテン、白坂唯さんのフェラチオ動画で～すw」

「んっ……ンンッ……んふっ…」

唯の目からは、大筋の涙がこぼれ落ちた。悔しさ、恥ずかしさ、情けなさ…そんな様々な感情が唯の心を支配する。

「唯ってそんなに涙脆かったっけ？泣きながらのフェラって超エロいんですけどw」

そう、彼女達の心には、涙なんて通用しなかった。それどころか、火に油を注ぐようなもの。そんな彼女達の性格はわかっているにも関わらず、それでもこの涙を我慢することができなかったのだ。アスリートで、キャプテンを任される程の女性でさえも。

「でもすっごい綺麗だから、もっとアップで撮ってあげるね。」

白坂

手元のリモコンでズームすると、ディスプレイ一杯に唯のフェラ顔が映し出される。

「うわ～、なんかめっちゃエロいんですけどぉ！マジAVみたいw」

「これは今日来てないメンバーにも見せなきゃね。」

「唯のクラスの子達にも見せてあげたいわw」

「んんぅ！んふっ……ンンッ！」

否定しているのか、唯は咥えながら大きめの声を出す。鼻フックで引っ張られている為、口から肉棒を放すことはできないのだ。そしてその声は、平田の性器を刺激する。

「あぁ、いいぞ～白坂。その調子でもっと声を出していけ。」

鼻フックを握る平田の手にも力がこもる。唯の頭の動きに合わせて、平田も腰を動かし始めた。そろそろイキそうのようだ。

「よ～し、上手だぞ～白坂。そのまま俺の腰の動きに合わせてついてこい。」

「ンッ……ンッ……んふっ……ンッ……！」

どんどん速くなる腰の動きに、唯は必死に食らいついていった。

そして――。

「あぁ…イクッ……白坂、舌を出せ！」

「ッハァ……ンハァ…ッ…」

白坂

「あっははは、先生下手くそwほとんど舌に乗っかってないし。」

「あ、あぁ…気持ちよ過ぎてな。ついつい勢いよく出ちまった。」

「鼻にも付いちゃってるしwくっさそ〜。どう？唯。臭い？」

「あ……ッ…ハァ……んっ……く、臭い……」

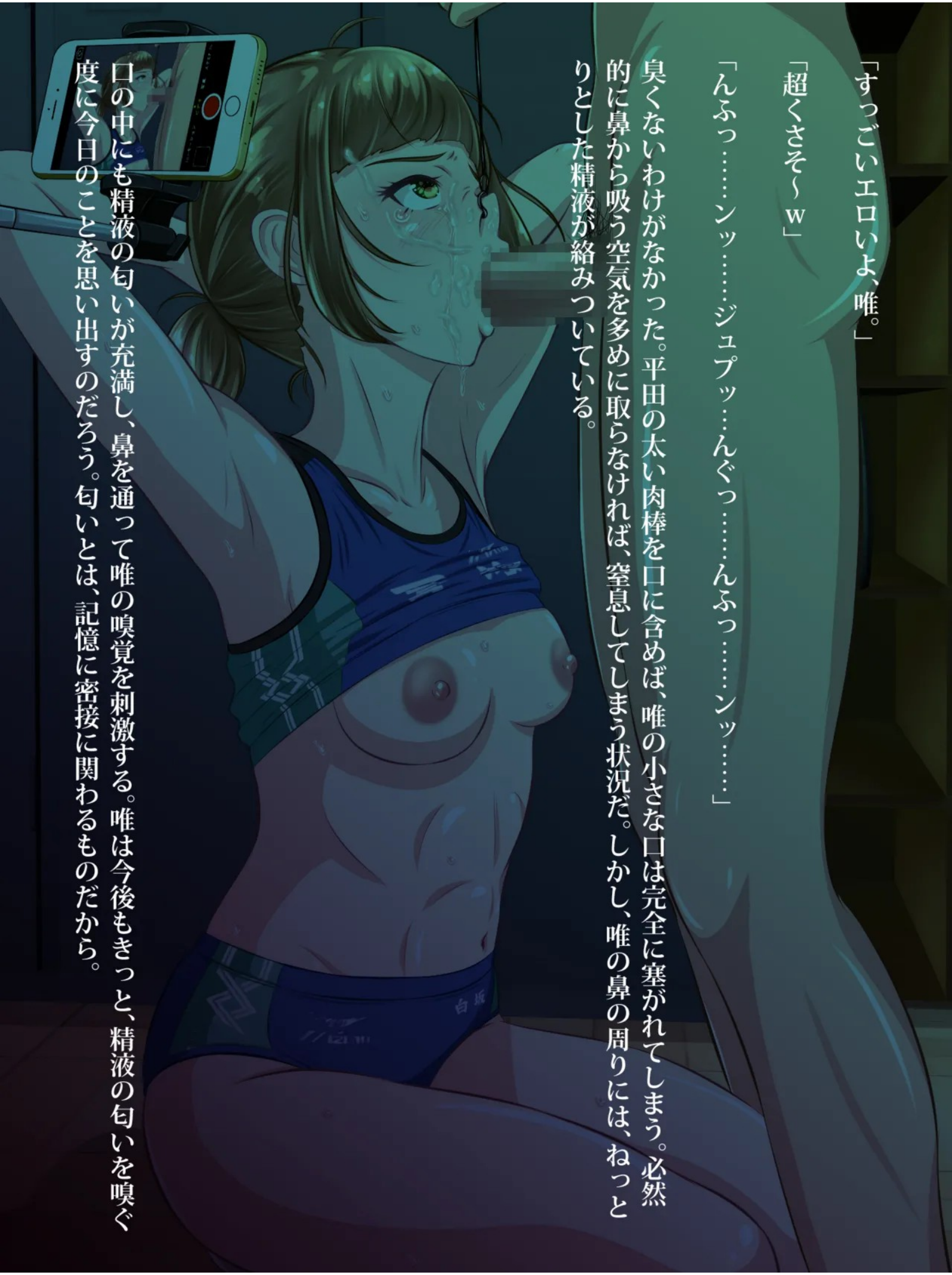
初めて嗅ぐ、精液の匂い。その鼻はクンと引っ張り上げられ、臭気の入口を広げられている。むせ返る程の匂いを放つ平田の精液は、今回のフェラと共に、しっかりと唯の脳裏に焼き付いた。

「よし、最後は仕上げだ。もう一度綺麗に舐め取れ。お掃除フェラだ。」

「……うっ……は、はい……」

消え入りそうな声で返事をすると、べっとりと精液がかけられたままの顔で平田の肉棒を再び咥えた。

白坂



「すっごいエロいよ、唯。」

「超くさそ～w」

「んふっ……ンッ……ジュプッ…んぐっ……んふっ……ンッ……」

臭くないわけがなかった。平田の太い肉棒を口に含めば、唯の小さな口は完全に塞がれてしまう。必然的に鼻から吸う空気を多めに取らなければ、窒息してしまう状況だ。しかし、唯の鼻の周りには、ねっとりとした精液が絡みついている。

口の中にも精液の匂いが充満し、鼻を通って唯の嗅覚を刺激する。唯は今後もきっと、精液の匂いを嗅ぐ度に今日のことを思い出すのだろう。匂いとは、記憶に密接に関わるものだから。

「よーし、じゃあそろそろ百梅学園陸上部の伝統行事を始めるか。」
「え？伝統行事って何？聞いてないんですけど～。」
興味津々と言った感じで、沙耶香は身を乗り出して平田に伺いを立てる。
「なんだ、お前ら知らないのか？てっきり知っているのかと思ったよ。この百倍学園陸上部にはな、代々伝わるキャプテン就任の儀式があるんだよ。」
「え？マジ？知らなーい。あたしたちはただ唯で遊んでただけだからwってか唯は知ってたの？」
「知らないよ、そんなの……先生、儀式って一体何なんですか？」
沙耶香とは対照的な不安げな表情を浮かべながら、唯は平田に聞いた。
「お前まで知らないのか、白坂。加藤からも聞かされてないのか？」
加藤は唯の一つ上の学年で、昨日まで部を引っ張ってきた前キャプテンだ。
「何も聞いてません…加藤さんもその儀式…受けたんですか？」
「受けるも何も、これをやらないとキャプテンにはなれんからな。というより、キャプテンに選ばれた以上は、その者に拒否権はない。それが伝統ってやつだ。」
もっともらしいことを言いながら、平田は何やら準備をし始めた。

「お前らにはアシスタントをやってもらうが、無闇矢鱈と言いふらしたりするのはやめろよ。場合によっては部の存続に関わるからな。特に今はＳＮＳの時代だから、意図しない形で拡散されても困る。充分に気を付けるんだぞ、いいな。」

「はーい。でも動画撮るのはいいでしょ？」

「まぁ、その辺りの所を気を付けるって約束できるなら、許可は出すが。」

「あー、だいじょぶだいじょぶ。ウチら鍵垢もあるし。」

平田と沙耶香の無機質な会話が響き、唯の心は不安が広がっていく。ただ一つ救いだったのは、加藤も経験したという事実だった。唯の知る限り、加藤はとても真面目で、間違ったことは許さないという正義感を持った女性だ。そんな彼女も経験したことなのであれば、或いは…。

しかし、平田が準備している物が何かわかった瞬間、唯の頭の中は真っ白になった。

「せ、先生……それって…」

「ん？ああ、牛乳浣腸だ。これで新キャプテンのユニフォームを清めるんだよ。」

唯は唖然としたまま、言葉を失った。そんな唯を尻目に、沙耶香は目を輝かせながら言った。

「え？え？浣腸した牛乳で清めるってこと？？何そのマニアックなお清めｗマジ草なんだけどｗ」

「よし、いいぞ。じゃあ白坂はここで四つん這い、みんなは白坂を抑えてくれ。」

そして、百倍学園陸上部の伝統行事『ユニフォームお清めの儀』が始まった。

IINE

「こんなデッカい浣腸器、初めて見たw」
「そうか？これくらいはプレイで使うには一般的だぞ。よ～し、白坂、入れるぞ～。」
唯は俯きながら、既に泣いていた。キャプテンの宿命、歴代の先輩方も通ってきた道。頭には加藤の顔が浮かぶ。昨日も一緒に大会に出て、夜は食事会で他愛のない話もした。そんな加藤にも、こんな過去があったのかと。あの笑顔の裏に、こんな儀式が行われていたのかと。
「それにしても、なんで白坂はユニフォーム着てたんだ？お前ら全員知らなかったんだろ？」
「ウチらもキャプテン就任のお祝いしてたからさ、そういう時ってユニフォームじゃん？壮行会とか。」
「なるほど、じゃあ本当にたまたまだったんだな。上の奴らも、白坂では耐えられないと思って言わなかったのかもな。」
「え～、でも唯は優秀だよ？こんなことくらいで負けないっしょ。ねぇ、唯？」
「んんんぅう、ンンン……ッ！！！」
「ほら、『うん』だってw」
唯の苦しみなど嘲笑うかのように、牛乳は唯のお尻の穴から腸へと注がれていく。沙耶香は興味津々な顔つきで、唯のお尻を覗き込む。
「どのくらい入るんだろ？ギリギリまで入れてね、先生。」

「まぁ、だいたいこの浣腸器二本分くらい入れれば充分だろう。」
「へ～、結構入れるんだね。唯、どんな感じ？」
「うっ…くっ……苦しい……ッ…お腹痛いよ……グスンッ…」
沙耶香達に押さえ込まれている以前に、浣腸の違和感が唯の動きを制御していた。これも初めての経験で、少しでも動くと出てしまいそうな感覚に襲われていたのだ。脂汗だけが唯の体を伝う。
「え、でもさ、これまさかここで出すとかじゃないよね？」
「おいおい、部室での噴射は勘弁してくれよ、白坂。」
「トイレに……行かせて…先生、もう入れないで……無理です…ッ…！」
「そうだな、これくらい入れれば充分だろう。」
「やだ～、ドキドキしてきたぁ♪どこでさせる？」
「臭そうだし、外のトイレとかでよくね？」
「だなwじゃあ唯、途中で漏らしたら困るからさ、スパッツ穿きなよ。んでスパイク履いて準備しな。」
唯にはもう、あれこれ考えている暇も、抵抗する余裕もなかった。沙耶香に言われた通りにスパッツを穿き、スパイクを履いて外のトイレに向かう。

百梅

一番最初に歩き出した唯だったが、お腹の違和感のせいで歩くこともままならず、気付けば沙耶香達から数メートル後ろを歩いていた。

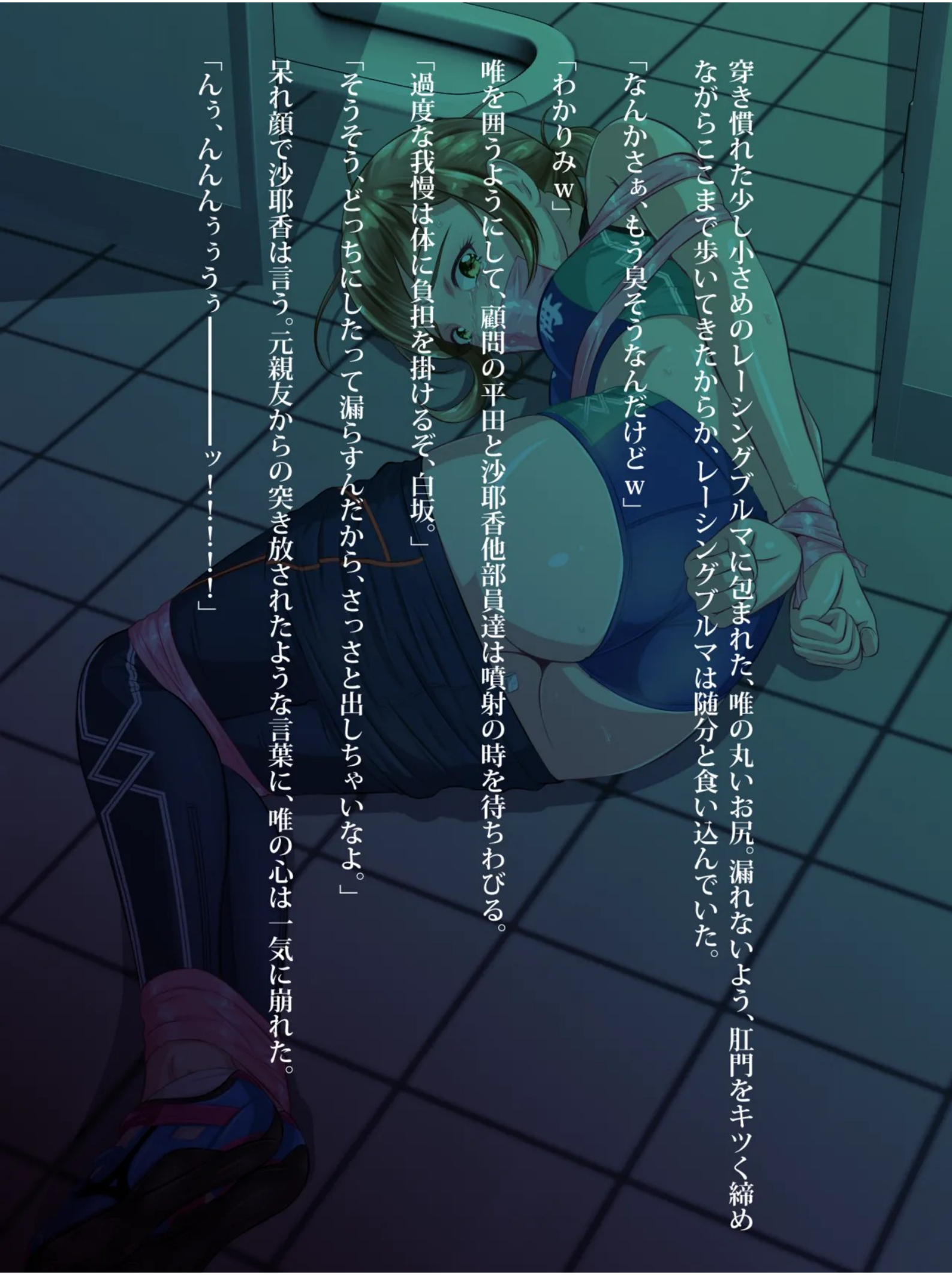
「うっ……くっ……ダメ、こんな所で……トイレまではなんとか耐えないと……ッ…！」

「唯ぃ～、早くしなよ～！」

先の方から、沙耶香の急かす声が聞こえる。気持ちは焦っても、体が焦らせてくれない。どちらにしても、唯に訪れる結果に大差がないのは明白だった。唯の思いは一つ、このまま漏らさずトイレまで辿り着くことだった。

必死の思いでなんとかトイレに辿り着くと、沙耶香は入口を塞ぐように立っていた。
「遅すぎだよ、唯。もうヤバいんじゃない？」
「……もう限界…ッ……早く中に……！」
「甘いよ。ね、先生？」
「ああ、キャプテンの道は茨の道だ。それをもっと体に叩き込んでやる。」
沙耶香は平田に粘着テープを手渡した。
「可愛い色でしょ？この前百均で見つけたの～。」
「白坂によく似合いそうな色じゃないか。」
そう言って動くこともままならない唯の体を、そのピンク色の粘着テープで縛り始めた。
「ちょ、ちょっと先生、何を……んっ…んんぅ、んむぅうッ！！！」

後ろ手・膝・足首と縛られ、胸の上下も挟むように縛られた唯は、トイレの地面に横たわっていた。
更に口にもピッタリと粘着テープが貼られ、身動きも声を出すことさえも塞がれてしまった。
「ほら、目の前に便器あるじゃん。頑張って移動しなよ。芋虫みたいにさw」
「んんぅぅぅぅ、んむぅぅッ！んふぅ！！」
もう無理だと言わんばかりに、唯は首を左右に振りながら呻く。強烈な便意は、すぐそこまで来ていた。
――少しでも動けば、出る。
「ちょっと唯、こんな所で出さないでよ？そこに便器あるんだからさぁ。」
沙耶香は悪戯に唯を追い詰める。わざと便器に届きそうな所で寝かせ、その苦悩を楽しんでいるようだ。
「ンンッ……ンッ……んふっ……ん　んむぅぅぅぅ！！」
声にもならない声を上げ、唯は苦渋の表情を浮かべる。
「そろそろ出るぞ。スパッツを下ろしてやれ。その方が派手に飛び散る。」
「りょうか～い♪唯のプリ尻見せてね～w」



穿き慣れた少し小さめのレーシングブルマに包まれた、唯の丸いお尻。漏れないよう、肛門をキツく締めながらここまで歩いてきたからか、レーシングブルマは随分と食い込んでいた。

「なんかさぁ、もう臭そうなんだけどw」

「わかりみw」

唯を囲うようにして、顧問の平田と沙耶香他部員達は噴射の時を待ちわびる。

「過度な我慢は体に負担を掛けるぞ、白坂。」

「そうそう、どっちにしたって漏らすんだから、さっさと出しちゃいなよ。」

呆れ顔で沙耶香は言う。元親友からの突き放されたような言葉に、唯の心は一気に崩れた。

「んぅ、んんんぅぅぅぅ――――ッ！！！！！！」

「うっわ、すっごw」
「汚ったねぇ、てかくさっ！！」
「あっはははは、マジウケるwブルマが清まってよかったねぇ、唯w」
「……うぅ……ッ……んっ……んむぅっ……！」

これまで、唯の記録を支えてきたと言っても過言ではない、大切なレーシングブルマ。やっとこれから、更なる活躍に向けて新しい第一歩を踏み出そうとしていた矢先の悪夢。

このユニフォームを着て、もっと記録を伸ばしたかった。
キャプテンの名に恥じぬよう、努力を重ねるつもりだった。

でも、もうできない。
大切なレーシングブルマが、親友や仲間・顧問の手によって汚(けが)されてしまったのだから。

「よ～し、今日は解散！」

「先生、唯はどうすんの？」

「そのままに決まってるだろう。これくらいのトラブルは自分で回避できないでどうする。」

「ふ～ん、そうなんだ。じゃ、お先ね～唯。頑張って抜け出さなきゃ、誰か来ちゃうよ。」

「あっははは wこんな姿誰かに見られたら、私生きていけないわ～。じゃあね、唯。」

「マジ無理～～ wじゃ、お疲れ～、唯。すんごいくっさいから、ちゃんとシャワー浴びなね。」

そして唯はトイレの中に取り残された。

牛乳にまみれたユニフォーム姿のままで。

百梅学園陸上部に代々伝わる伝統行事、『ユニフォームお清めの儀』。
浣腸で牛乳を流し込み、その噴射によってユニフォームを清めるという儀式。
その儀式によって清められたユニフォームを身に纏(まと)ってこそ、真のキャプテンと認められる。
またの名を『ロスト・ユニフォーム』。
この儀式に耐えきれず、陸上部を去る者も少なからず存在した。
ユニフォームを奪われし者、その後、姿を現さず。
今回の唯もまた、『ロスト・ユニフォーム』の経験者として、表に出ない名簿に名を連ねたのだった。

ロスト・ユニフォーム～陸上部編～　終

企画・制作　二次元スタジオ BLACK★BASE

Soar,
like a
petal.

Soar,
like a
petal.

Soar,

ガリ

Soar,
like a
petal.

Soar,
like a
petal.

Soar,
like a
petal.
MIZUNO
asics

Soar,
like a
petal.

Soar,
like a
petal.

Soar,
like a
petal.

百梅
白坂

MIZUNO
百梅

くいっ
MIZUNO
百梅

百梅
MIZUNO

百梅
白坂

百梅
白坂

白坂

白坂

白坂

白坂

白坂

IINE

百梅

Soar,
like a
petal.

Soar,
like a
petal.

Soar,

ガリ

Soar,
like a
petal.

Soar,
like a
petal.

Soar,
like a
petal.
MIZUNO
asics

Soar,
like a
petal.

Soar,
like a
petal.

Soar,
like a
petal.

百梅
白坂

百梅
MIZUNO

くいっ
MIZUNO
百梅

百梅
MIZUNO

百梅
白坂

百梅
白坂

白坂

白坂

白坂

白坂

白坂

IINE

百梅